

の 園 林

339
329

パス

タン



2

0056131-000

特 2 1 0 - 5 3 5

米国の国際間諜室

高村源雄・著

泰光堂書店

昭和6

AJB

この著作物は、著作権者不明のため、著作
第67条の規定に基づき、平成12年3月
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するも

339
329

の園*

聖物 威

ブイパス

タン



438

特210
535

文學士 高村源雄 著

ゼ アメリカン インターショナル スパイ クラブ
The American international Spy club

米國の國際間牒室



東京 泰光堂

目次

謹嚴な日本紳士……………一
半死の労働者……………四
東洋古美術商人……………七
破られた紙片……………一〇
暗號指令書……………一六
指令書の内容……………二〇
美女スパイ入用……………二四
女間諜を募集？……………二八
買収された女群……………三二
妖婦の暗中飛躍……………三六

ヒネスも亦凄腕を揮ふ……………四〇

米艦隊の一頓挫……………四五

浮世繪を賣りに來た日本人……………四七

アパート内の密議……………五〇

X氏の失踪……………五四

重大任務……………五八

偽結婚……………六一

警官隊の徒勞……………六五

神謀鬼策……………六八

機密漏洩……………七一

最愛の妻? 憎むべき敵手?……………七五

萬引のトリック……………八二

獄内の傳令……………八五

途上の奪取……………八九

青い鳥酒場……………九一

英國間諜容疑者……………九四

國際的間諜クラブ……………九七

怪女傑マダム・ペリー……………一〇〇

鑑定違ひ……………一〇五

策謀の大誤算……………一〇九

敵を飼ふ愚者……………一一三

時節外れの快走船……………一一五

大膽なる告白……………一二〇

兩國利益交換……………一二三

間 牒 <small>スバイ</small> の 戀 <small>こひ</small>	一七五
黄 金 <small>こん</small> 慾 <small>よく</small>	一八〇
再 度 <small>さいど</small> の 冒 險 <small>ぼうけん</small>	一八三
浪 費 <small>らうひ</small> 者 <small>しや</small>	一八七
技 術 <small>じゆつ</small> 官 室 <small>くわんしつ</small>	一九〇
生 か して は 置 け ない.....	一九六
日 本 大 新 聞 の 重 大 事 件.....	二〇一
國 務 省 内 の 密 議.....	二〇四
壁 に 耳 あり.....	二〇九
秘 書 課 の 女 子 太 伊 比 斯 ト.....	二二二
彼 女 の 任 務.....	二二七
密 書 來 る.....	二三〇

戰 時 編 成 企 劃 書.....	二二七
謎 の 狙 撃.....	二三〇
重 傷 を 負 ふ た モ ン ス リー.....	二三四
華 盛 頓 へ 密 使.....	二三七
列 車 中 の 早 や 業.....	二四二
各 國 間 牒 の ポ ー ト レ ー ス.....	二四五
間 牒 の 人 間 味.....	二五〇
警 告 を 與 へ た レ ン テー.....	二五三
英 國 ス バ イ の 最 後 の 功 績.....	二五六
ス バ イ の 觸 手 に 伸 び る.....	二六〇
犯 人 は 工 廠 内 に あり 否.....	二六五
寡 黙 な 職 工.....	二七〇

大平洋沿岸の防禦……………二四

スバイ發覺……………二六

俺の父は日本人だ……………二九

悲しき回想……………三四

ニツホン・ヨコハマ……………三七

ハリリーの終焉……………四〇

目次終

The American international Spy club

米國の國際間諜室

謹嚴な日本紳士 文學士 高村源雄 著

殆んど歐洲全土を灰燼に化すかと思はれたあの大戰の慘劇に依つて世界地圖の色彩が大分變更され各交戰國の戰爭による國家的疲勞は長い休養期を要した。

だがアメリカ合衆國だけは戰爭に依つて莫大な利益を占めた。物質萬能的には世界の最優位を贏ち得たと云つて宜かろう、大統領ウキルソンに依つて世界人類に向つて高く呼びかけられた戰爭廢止の平和會議提唱は一躍彼の名を有名にした黄金の洪水に浸されたアメリカの資本家は國內に投資の必要を知つて、他日莫大な利益し上げる事を豫想しながら外國に向つて恩惠的借款を承諾した、過剰な

る資金の運用のため國內には産業が大いに勃興した。

だからアメリカ人は高慢ちきなヤンキー、ノオズをむしる國外に向けて誇つた
米國第一主義と。

この國を擧げて黄金の渦巻に巻き込まれて狂奔し陶醉してゐる一九一八年の春
の事であつた。S P 線で米大陸を横断して世界第一の都市を誇る紐育に着い
たトランク一個携帯といふ輕装の日本紳士があつた。

聰明と冷徹を思はせる皮膚の白さ、思索的な立皺の寄つた眉間、意志の強さを
思はせる引締つた唇、年齢は誰が見ても三十四五歳に推定されるのだ、彼は殆ん
ど用事といふものを持たなかつた様だ。毎日市中を見物して廻つた。それが約一
と月も續けた。マヂソン、スコキア、でもブロード、ウエーでも、フォアテ、
セカンドストリートでも、それこそ横町や露路の隅々まで見て廻つたのだ。それ
が又細心に注意深く、唯の遊覽客の見物とは全く違つた態度であつたから、そ

の一ヶ月間案内者だつたキアローといふ人の善い親爺は

「旦那、貴方は社會學者でいらつしやるんで御座いませう」

と云つたが彼はそれに答えず口邊に微笑の影を見せる切りであつた。

彼はそれからホテルを引拂つて新聞廣告欄で静かなアパートの貸間を借りて住
んだ。そして毎日圖書館に通つた。彼の書齋には大きな書架が三つもあつて、ぎ
つしり書籍が詰まつてゐた。態度が物靜かで上品な言葉遣ひだつたから、宿の主
婦は

「あの方は學者ですよ」

と吹聴してゐた。

全く彼は誰が見てもそう見えたのだ。それに交友といふものは絶無であつた。

誰でも他國にゐると故國の人間と親しくなるものなのだが彼に限ては一人の友人
が彼のもとに訪ねて來たためしは無いのだ。だから餘程の變人らしい。

彼は夕方になると毎日規則正しく散歩をした。その間は丁度一時間であつた。彼は實に謹嚴な典型的日本紳士だつた。

半死の労働者

だが折々は下町の賑やかな盛り場へ行つて寄席とか酒場へ入つて見るか、裏街通りを漫然と歩き廻つて來る事があつた。或る時下町の裏通りを歩き廻つてゐるとある酒場の前で黒山のやうな人集りで、何やら大聲で喚いて喧嘩をしてゐた。見ると一人の労働者風の男に水兵が四五人で散々に擲り付けてゐた。

『どうしたんです』

彼は傍の男に尋ねた。その男は彼が東洋人である事を知ると怪訝な顔をして

『よく解りませんが、あの擲られてゐる男が酒場の中で水兵のポケットから金を掘つたといふ事です』

と云ふのだ。

滅茶苦茶に所嫌はず擲られ、メリケンを入れられ、全く半死半生でノビてしまつた。そして猛獸のやうに呻いてゐた。

周圍に集つてゐた群衆は喧嘩が終ると散り散りになつたが、博愛で人道主義を鼻にかける基督教國の米國人は誰一人、その男を助けやうとする者が無かつた。

日本紳士は一時皆と一緒に其處を立去つたと思ふと間もなく自働車に乗つて亦戻つて來た。そして運轉手と一所に倒れてゐる労働者を自働車へ運び入れた何處となく立去つた。

労働者は病院に入れられたのだ。全治三週間の負傷だつたが毎日見舞ひに來て呉れる日本紳士が自分を助けて呉れたのだと知ると手を伸ばしてしつかり紳士の手を握つた。紳士は黙つて微笑して頷くだけだつた。紳士が費用を惜しまず出して呉れると見えて、彼には好過ぎる程の待遇だつた、そして紳士自身、も見舞に

来る時は美しい花束を持って来て飾つて呉れるのだ。

「日本の旦那、有難う御座います、この恩は死んでも忘れませんよ」

「人間同志お互の事だ、そんな事を気にせず早く歸り給へ、癒つたら私が何處かの温泉へ連れて行つて轉地療養させて上やう」

「あゝ旦那は神様のやうな方だ」

労働者は鬼の目に涙といふやつで大粒な涙をぼろ／＼出して感激した。

そしてその約束は果たされたのだ、彼が退院すると日本紳士は労働者を連れてコーネーアイルランドの空気の好い海濱へ連れて行つて呉れたのだ。

労働者は、この世の中にこんな親切な人は有るものだらうか、どうしてこんな俺見たいな男を我が子のやうに面倒見て呉れるのか、不思議な事だ、この人は一體何んだらう、と思つたが、この日本紳士の端麗な風采と極めて學識の高い、慈愛の籠つた、品性の高潔な典型的な紳士であつたから労働者は聊も疑ふ氣になら

ず、否この命の親の紳士に絶対無條件で心服したので。

この労働者は後日、紳士の爲めに部下となつて生命を賭して働いたのである。

東洋古美術商人

歐洲大戰がやつと終熄して、この大戰のお蔭で世界一の成金國になつたアメリカの豪勢振りは全く素晴らしいものだつたこの、絶頂の好景氣が聊か下向しかつた一九二一年の冬時分であつた、紐育市の第五番街の東四丁目の通りのエクトル薬局と軒を並べた小ぢんまりした貸商店を月五百弗の契約で借りた中年の商人があつた。頑丈な體格の見るから精力旺盛らしい赫ら顔の、第一印象からして飲酒家らしく樂天的な風采で、名をジョンズ、ヘンダーソンと言つた、彼の言ふ處に從へばスタンダード石油會社の東洋派遣社員として横濱、神戸、に七年間在勤して日本の事情には非常に明るくて、初めは趣味で蒐集した東洋の古來術品に對し

て相當鑑賞眼を持つやうになつたのが病付で遂に東洋出張期限が満了して歸國すると同時に會社を辭職し一生を東洋古美術品の研究傍ら紐育で、骨董商を開業する事になつたと云ふのだ。成程彼はその店舗を借りるとその翌日、トラックで夥しい荷物を新らしい店舗に運び込んだ、そして陳列箱や飾り窓に日本や支那の珍奇な陶器や佛像、繪畫等を手際よく並べて日本製の提灯の中へ電燈を仕込んだり大へん異國的情調を横溢さして主人のヘンダーソンは得意の鼻を蠢めかして自ら悦に入つてゐるらしかつた、店看板に堂々と東洋古美術品店。ジー、ヘンダーソンの金文字が眞新しく輝やいてゐた。

この東洋の骨董店といふのが此土地ではかなり風變りな商買だつた故か開業早々から近所の評判になつて贅澤なブルジョアの異國趣味に投じて自働車をヘンダーソンの店に横付けにして神秘的な東洋の美術品を漁る顧客が毎日狭い店内にうよ／＼する程はやつた。ヘンダーソンはそれらの大勢の顧客に満遍なくお世辭を振

り巻いて自分の東洋美術に對する造詣の深さを誇り顔に説明するのが如何にも嬉しそつた。例へば斯んな風に、

『この花瓶は九谷焼と申しました、日本陶器で最も絢爛な色彩を施した陶器です、これは最近日本から世界各国に輸出される模造品では絶對ありません、眞證正銘の古美術品で年代は百年以上経過したもので、日本内地でも中々廉價で求められませんのです』

それに對して顧客がなる程左様かと頷くのを見ると、一層辭を低うして

『私共の店に於きましては私自身が趣味を持つて研究してありますので決して眞偽の不明瞭なものはお買上げを願はない事にしてありますから、どんな品物でも御安心下さつてお求めを願つて宜敷いので』

と言葉巧みに顧客の購買心を唆つたものだ。それに彼の店の品物は顧客の豫想以下に廉價だつたから、いくら金の唸る程あるブルジョアでも廉いものには手の

出るのが人情で大いに彼の店は流行つた。

それで第五番街のヘンダーソンの骨董店といふと紐育でもかなり有名な店になつたのである。

ヘンダーソンはまだ獨身者であつた、四十過ぎてても妻帯しないといふ事はアメリカでは別に不思議な事ではない。相當の財産を貯める迄獨身である男は他にも澤山あるのだ、彼は店の手代にコツプスといふポストン生れの實直な青年と女中のフアナとの三人切りの小家族だつた。

破られた紙片

ヘンダーソンは商買の外に別に道楽といふやうなものは無かつた、それと云ふのも抑け彼の道楽の骨董いぢりを職業としてゐる故かも知れないが彼も四十は過ぎたりは云へまだ獨身ものの事だから時々思ひ出したやうに假禮服や燕尾服を着

込んでブロードウキーあたりに出掛ける事が無いでも無かつた、その他世界各国の新聞を十幾種も取つて毎日店を閉ぢてからそれを讀むのが目課だつた、日本の新聞ではジャパン、アドバタイザ、ジャパン、タイムス、コーベ、クロニクル、英文日日、等があつてヘンダーソンは特にこれらの英字の日本新聞を熱心に熟讀する様であつた。

それにも一つ、日本から仕入れた商品、それはいづれも高價な骨董品だけに彼自身税關に行つて査證を受けるのだ、そして持ち歸ると、コツプス青年を手傳はして一と先づ自分の居室へ運び込んだ、そんな晩彼は遅く迄起きてゐて骨董をいぢくり廻してゐるやうだつた。

ある時止むを得ない用事があつて自分の代理とコツプスを税關に行かした、コツプスは歸つて來て

『旦那、荷物に破損した品ものがありましたよ』

ダンヒルの紫煙を悠るやかに吐き乍ら仕入の帳簿を繰つてゐたヘンダーソンは急に目をあげて

『何んだその品物は』

『えい、これです』

と頑丈な木造りの荷箱から蒔繪黒漆の手篋を取り出した、それは蓋も身も縁が亂暴に取れてあたら美しい手篋も片なしになつてゐるのだ、ヘンダーソンは無言で立ち上つて来て破れた手篋を手にとつて注意深く見廻してゐた、

『あのう、それからこの手篋の底蓋の間から、こんな紙片が出て来たんですが、捨てやうと思つたけど、何かこの手篋の由緒書かも知れないと思つて持つて来ました。』

コツプスは懷中を捜した、

ヘンダーソンはその一瞬間サツと表情が變つた。

『どれ、どんな紙片だ』

『へえ、これです』

コツプスの出したのは長い時代を経て穢れたらしい古い日本紙で毛筆で非常に不明瞭な肉太の日本文字が書かれてあつて半分千切られてもした様に裂けてゐたコツプスの手から奪ふやうに手に掴んだヘンダーソンは明らかに狼狽の色を浮かべながら

『これ、お前が見付けたのか』

『えい、左様なんです、税關吏の検査が済んで箱の中へ元通りに詰め換えやうとするところの壊れた手篋の底蓋の間から落ちたんです』

『ふむ、破れてゐる。誰か途中で……』

ヘンダーソンは思はず口の中で呟やいて眉根へ深く皺を寄せた、これはヘンダーソンの不快な時にする表情だつた。

一體ヘンダーソンは何者だろう、表面通りのたゞの骨董商人なのだらうか、それとも國禁を破つて官憲の目を眩まして危ない綱渡りをする密輸入商人でもあらうか、すべてはヘンダーソンの正體は今のところ影像のやうに何となく朦朧としてゐるがこの話を進めて行く内に仕第に明瞭に明るい日光の下にはつきりと浮び出るだらう。

その日一日ヘンダーソンは毎時に無くむつつりと黙りこくつて不安そうに考へ込んだり立つて店舗中を歩き廻つたり如何にも落着かない様子だつた、夜になつて店を閉めると晩食もそこそこに、いつもなら白葡萄酒のグラスを樂しみにゆつくりと晩餐氣分を味ふのだが、今夜はフアナが白葡萄酒と瓶とグラスを食卓へ置くと手を振つて急いでスープを啜つたのだ、そして着換えもせずにはふらりと外出したヘンダーソンは何處を訪ねるつもりだ？

紐育の川向ふの裏街、それは何處の國にも、どんな都市にもある貧民窟だ、都

會機構の一部分だ、其處では都會的華麗と豪華の對蹠をなす汚穢と敗殘のグロの巢だ、米國上院議員のトーマス、レント氏は、ある慈善事業大會の演壇に立つて『世界で最も美しい、最も文化の進んだ、否、文化それ自身の結晶だと云ひたいこの紐育に於て尙ほ、あの哀れな敗殘者達が如何に不衛生な生活してゐるか、それを確實に御存知になりたい方は一度川向ふの街を御視察なさるが宜しい』と迄言つた。

その裏街の惡臭に満ちた狭い道路、鎧扉の蝶番ひの取れてよく閉まらない窓、壁が剝げ落ちて骨の露はな低い二階建のアパート、此處には街頭労働者、屑鐵拾ひ、こそ泥、無職のルンペン、大道藝人とそれから極く下級な街の娘、そんな連中の住居だつた。

ヘンダーソンはこの街へ入つて來たのだつた、日はとつぷりと暮れて日中でも蔭の多い通りは街燈の乏しいこの街は闇に近い程暗かつた。

漸く五丁目の二十三番地の建物を見つけたヘンダーソンは角から二軒目の風雨に曝された軌んでゐる扉の前に立つて案内を乞ふた。

「この家にミスター、ヘラーマンはゐるかね」

耳の遠そうな婆が出て、

「はい、今夜はおいでになりますよ、貴方は誰方かね」

「ターリーが訪ねて来たと言つて呉れれば解る。外は客は無いんだらうね」

ヘンダーソンはそう云ひながら銀貨を一枚婆の皺だらけに掌の上へ乗せてやつた、第五番街の東洋古美術商、ジョンズ、ヘンダーソンがターリーとは何故そんな偽名を用はねばならぬのだらうか。

暗號指令書

「商買の方はどうかね」

「中々好景氣ですよ、しろものが上等で、それに廉價で賣るから忽ち信用を博して、今では五番街のヘンダーソンの骨董店と云へば紐育の富豪連中に評判になつてゐますよ」

「大した勢だね、然し、しつかりやるさ、今夜は亦どうして訪ねて来たんだね、何か急用が出来たとでも云ふのかい」

「左様、ちよつと困つた事が出来ましてね。」

ヘンダーソンは叱られた猫のやうに極り悪そうに耳を掻いた、相手は黙つてヘンダーソンの顔を見た。

「つまり貴方のお智慧を借りて甘く瀾縫策を溝せんと云ふと飛んだ大きな火にしてしまつては取返しが付かんですから」

「それは一體何した事かね」

相手は別段騒ぎもせず卓に片脰ついて紙巻煙草にライターの火を移した。

『その今日着荷した品物の中で壊れものがありましたね、蒔繪の手篋なんです
ね、處が悪い事にはその底蓋に鑑定書に見せかけた暗號指令書が出て來たんです
がそいつが半分から裂かれて無くなつてゐるんですよ』

『ふむ、それは困つたね』

『それが、どうも故意にやつた仕業らしいんですね、船中でやつたものか税關の
査證前に倉庫へ忍び込んでやつたものか皆目見當が付かないので弱つてゐるんで
す、何とかして一時も早く善後策を講じないと……』

『ふむ、それでその半分の指令書を解讀したのかね』

『え、讀んだんですが、肝心の後半の指令の部分が奪はれてゐるので、要領を
得ませんが』

『持つてゐるなら出し給へ』

ヘンダーソンは短衣の釦を外しワイシャツの内懐からでも大事そうにその暗號

指令書なる謎の文書を出すかと思ふと左にあらす、意外にも右足の靴をボンと脱
ぐと指で底皮をずらして小さく疊んだ一見紙屑としか見えない紙片を恭々しく取
り出したのだ。

『どれ』

相手の男はその紙片を叮嚀に擴げて獵燭に近く顔を寄せた、この部屋は何故か
電燈が無くて獵燭を灯してゐるのだつた。

『ふむ、大西洋上で演習する艦隊に可及的に各艦船に乘込ませて砲種と着弾距離
と、飛行機の戦闘能力と……後は無くなつてゐるんだな』

紙片をちつと贖めて相手の男は暫く黙つて考へてゐた。

『それ丈でも大概解けることは解るのですが、後半どんな重要な事が指令してある
か、それが解らないので』

ヘンダーソンはそれが全然自分の過失のやうに詫びるのであつた。

指令書の内容

「大體の消息は此方も聞いてゐるからこの指令書の内要は解つた、裂かれた後半の紙片は到底戻つて来まい、その荷を積んで来た船は十月五日の午後三時入港のメキシコ、シチー號だろう」

「左様です、よく御存知で」

「あの船には米國のスパイが三人程乗つてゐるのだ」

「すると、私共の計畫は彼等に探ぐられてゐるのですか」

ヘンダーソンは急ぎ込んで尋ねた。

「否、最初はそうでなかつた。あれは佛蘭西海軍の特務將校がある目的で乗つてゐるのを監視するので乗つて居たんだ、だがどうして君の荷物に目を付けたのかね」

「何せ、私の荷物にあの秘密文書が入つてゐたといふ事では私は今後仕事が出来なくなりませす」

ヘンダーソンは恐怖と不安とで顔を曇らせてしまつた。

「そう心配せんでも好い。何とか成るだらう、私が止せと云ふ迄平氣で營業を續けて居給へ、私はこれから用事があるから君は歸つて呉れんか」

と云はれてヘンダーソンは悄氣返つて引下つた、彼がああのペンキの剝げた扉の外へ出て行つて仕舞つたと思はれる頃、この部屋の主入である謎の男は靜かに立上つて右の壁をコツコツとノックしたのである。耳を澄ますと壁の向ふからもそれに應答するつもりかコツコツとあたりを憚るやうに聞えて来た、すると驚くべき事には壁際に据えた戸棚が脊後へひとりでに退つて行つてぼつかり洞のやうな穴が壁に明いたのだ、眞暗なその穴から熊のやうに此方の部屋へ這出して来たものがあるではないか、やがてその怪物は立上つて戸棚を元通りにすると、此の部

屋の主人公へ尋ねた。

「誰か来てゐましたね」

「あゝ、ヘンダーソンが来たのだ」

「ふゝん、奴さん狼狽に来る筈だと思つてゐた」

「どうして、それがお前に解つた」

「彼奴、何か盗まれたんでせう」

「ふむ、然しヘンダーソンの責任ぢや無さそうだ、ヘンダーソンももう睨まれてゐるらしいんだ」

「何アに、彼奴がお芽出度えからさ、先生、ヘンダーソンの盗まれたつて紙片はこれぢやねんですかい」

怪物見たいな男の男、それはよく埠頭なんかと見受ける労働者態の男だが、熊のやうな掌から蟲でも掴まんだやうにそつと載せて此部屋の主人公の目の前に突

き出したのだ。

「どうしてそれがお前の手に入つたんだ」

手に取りながら尋ねると、

「先生、ヘンダーソンの店にゐるコップスといふ若僧、ありや曲者ですぜ、屹度

彼奴は米國牒報局のメンバーですよ」

「どうして」

「どうも斯うもあるもんかね、今日のヘンダーソンの肝と玉を縮まらした仕事は彼のコップスの仕業なんですぜ、俺ア埠頭の税關詰所の處を迂路ついでゐると彼奴それ共知らねえでトラックを第三番街のアトランチック商會の倉庫へやれと云やがつたんでさア、俺ア、ヘンダーソンの店の番頭の癖に可笑しな眞似しやがると思つて、こつそり自轉車に乗つてトラックの後をつけたんでさア、そしてアトランチック商會の倉庫の壁へ這ひ上つて窓から覗くとどうです、あの若僧奴、い

「加減な中爺とこそく話して荷箱を明けて奇麗な小函を出して中から紙片を出すと真中から引千切つてその中爺に渡したんです、そしてから小函を叩きつけてぶつこわしやがつたんですぜ、俺ア、こりや、屹度、曰くがあると思つて何喰はぬ顔して倉庫の前をぶらくしてその中爺が出て来ると突き當る拍子に内ポケットの紙片に此方へ貫つちやつたんで、序でに野郎のシーズも頂戴して置きましたよ」

「左様か、そいつはお手柄だつたな」

此部屋の主人公は賞めたので労働者態の男は

「なアに、これしきの事は手柄でも何でもありませんや」とは言ふものゝ矢張り嬉しそつであつた。

美女スパイ入用

此部屋の主人公を假りにXとして置こう、Xは静かに立上つて戸棚から皿と何か薬の入つてゐるらしい小壺を取出して卓へ戻つて来た、皿に水差しから水を注いで小壺から白い粉を極少量注いだ、水に充分それが溶解するのを認めて紙片を水に浸すのであつた、労働者態の男は好奇の目を光らして瞞めてゐた、Xは無言で水の中の紙の面を窺がふと少時して紙面に白く細かな文字が現はれたのであつた時分はよしと水をあけて紙を静かに皿から取出し吸取紙で水を切つてその文面を讀んだ。

「この件に就きては米國海軍の嚴重なる監視あるべし、従つて乗組すべき人選充分注意せらるべし。尙ほ英佛兩國同様手段ある如き情報入手せり、可然く當方好條件なるを要す」

とあつた、紙片は書籍の間へ挟まれた、紙巻煙草に火を點じたXは一服ゆつくり吸つてから

「あ、艦隊の水兵共は主にどの方面の酒場へ行く？」

「大抵奴らの行く酒場なら知つてまさア、何ですか」

「いや知つてりや、好いんだ、處でお前の手で女を五六人仕事に手傳はせ度いんだが、それだけの人数揃える事が出来るかね」

「五六人とはちと多いな、然し何とか成りませう、それでその女共にさせる用とは？」

「ふ、艦隊の水兵さん方にちやほや歡待して上げるのさ、それには各酒場へ一人宛入りこませるんだが、それもお前の手で出来るか」

「そりやわけの無えこつてさア、だが女を五六人は少し難かしい仕事です、唯の女ぢや五萬とあつて仕様がねえんだが」

「金はいくらでも出す、二萬弗でどうだ」

「二萬弗、そんなに出すんですかい、そりや大變だ、宜うがす、金に物言はせて

ちやんと使命を果さして御覽に入れます」

「その女達の使命は、水兵共を甘く弄絡して酔はせて置いて聞き出す事は現在の投錨地から出港の豫定と戦時編成の總員數、砲門の種類、彈藥庫の位置等だ、その外にもつと面白い使命があるんだ、いゝ加減酔拂つたら一服盛るんだ、酒の中へちよつと粉を入れりやいゝんだ重大なやうでやさしい仕事だよ」

「殺してしまふんですかい」

「いや、二週間位ベツトに呻吟さす程度だ、命を落すやうな事はないさ」

「解りました、やりませう」

「早い方が好い、今夜からでも着手してくれ、金は今やらう」

Xは何時の間に用意して置いたが紙間包みの紙幣束を机の下から出して卓の上へ紙屑のやうに投り出した。

女間諜を募集？

労働者態の男はXの部下である事は既に解つた事と思ふ、彼は通稱ハリイと呼ばれる紐育の拘摸の腕利きだつたのがどうしてXの許に身を命を賭す危険な間諜になつたか、それは後日に譲つて、現在ではXを絶対に心服してゐる一人であつた。好い事にはハリイはこの命の瀬戸際を渡る冒険事業が彼れ持前の肝ツ玉の太いところと共鳴して興味を抱いて仕事を敢行することだつた。

ハリイはXの命を受けるとすぐその足でギャングランドの仲間の處へ行つた、其處には女拘摸で以前彼の情婦だつた山猫のビーナが同じルンペン妖婦共とごろくしてゐたのである。まづビーナに當つてやれと思つたのだ。

「景氣が好いのか」

入つて行つたハリイは寢臺の下に酒瓶が轉がつてゐて、アルコールの匂が女の

體臭に交ちつて淫りがましい程ムツトするのだ、

「景氣が好けりや、今頃こんな家の中で燻ぶつてゐやしないよ」

五六人の女がベッドやソファに寝そべつてゐたが、山猫のビーナが頭をあげて

答へた、

「でも酒を飲んでゐるぢやないか」

「自暴酒さ、ハリイ、お前さんの景氣はどう」

「俺ア、不景氣知らすよ、何時だつて五千弗や一萬弗を缺かした事アねえ」

「ふん、おつしやる事ねえ、五千一萬を持つ御人體かい」

「こりや御挨拶だな、斯う見えなつて、俺ア、ちゃんとした弗箱が控えてゐるんだ。嘘と思つたら、一つお目にかけてやうかい」

「お前さんが千弗と纏まつた金を持つてたら妾ア、お前さんと今直ぐでも結婚するよ」

「よし来た、屹度だな、驚ろいちやいけねえ」

ハリーはにや／＼しながら上着のポケットから手の切れるやうな眞新らしい二十弗紙幣の束を五つ六つ、卓上へボンと無造作に放り出したのだ、女達はピーナはじめ飛び起きて呼吸をつめて卓の上を疑視した儘物も言へないのだ。

「アハハハ、ピーナ、何にそんなに驚く事アねえ、これんぼつち俺ア、金と思つてやしねえんだ」

「ハリー、お前、好い腕を持つてゐたんだねえ、ねえ、ハリー、妾アお前と結婚しても好いよ」

「そんな約束だつたな、然しそれはどうでも好い、外の姐さん方、どうだ俺ア、ブルジョアだろ」

「本當にねえ」

女達は感歎に望を潤ませてゐるのだ、ハリーは先づ相手の度肝を引ッこ抜いて

から徐むろに根據を突かうといふトリツクだ。

「お前らも俺見てえになりねえな」

「だつて、どうしたらそんなに金が入るの、男つて羨ましいわねえ、荒つぽい仕事が出事るんだもの」

赤毛のメリーが歎息した。

「お前え達だつて出来るのさ、まアい、や、處でピーナ、一所に出掛けねえか少し用があるんだ」

「本當かい、行つても好いよ」

ピーナはハリーが意外な大金を持つてゐるので拜金の米國人根性を露はして嬉々として外出の仕度をした。

二拾弗札一枚づゝ五人の女に投げ與えてハリーはピーナを連れて出た、五人の女の羨望の瞳に送られ乍ら。

ビーナを連れ出したハリーは彼等仲間がよく行くファン、ラーチンといふ支那人の経営する阿片窟だつた、狭い特別室に二人は入つて鍵をかけた、ビーナはハリーが何を要求するかちやんと豫想してゐた、そして今はそれを喜んでゐたのだ然しビーナの豫想は美事に的をはずれてゐたのではなかつたか。

ハリーは強烈な支那酒のカクテルで瓜子をポリポリ噛み乍ら何気なく世間話をしてビーナの氣を引いて見たのだ。

「お前さん、妾にも少し何か好い仕事を分けてお呉れよ、妾は近頃ドヂばかり踏んでクサつてゐるんだよ、何か好い仕事はないかい」

「滿更無え事もねえが、お前が本當にやる氣なら教えてやつても好いぜ」

「お願いです、着物だつて最新流行のものが着たいし、オペラだつて近頃丸きり

見に行かれないんだよ、どんな事でもして見せるよ、お金にさいなりや」

思ふ壺へ向ふから嵌つて來るではないか、ハリーは内心占めたツと思ひながら顔には出さず、

「でも仕事といふのは金には成るかはり少し難しいぜ、と云つても覺悟さい持つてゐりや何でもねえ事なんだ、仕事は本當は赤ん坊の手を捻るより優しい仕事なんだ、そして金はちよつとの間で千弗ぐらい儲るんだ」

「教えてよ、そんな好い仕事なら、妾アどんな事でもするよ、ねえハリー」

「だがお前、秘密の神聖な事を知つてるか、それが第一だそれさい誓ふ事が出來りや後は何でもねえんだ」

「秘密を守る事は妾には屹度出来るよ、いつか妾しがドヂを踏んで警署へアゲられたろう、あの時随分ひつばたかれたり蹴られたりしたけど仲間の名はこれつばつちも口から出さなかつたよ」

成る程そんな事があつたのだ。

「よし、では誓へ、俺と一所に仕事をする以上、命令に對して絶対に服従、仕事には誠實、他人には秘密厳守」

「すべてハリリーの言葉に依て誓ふ」

ビーナは右手で胸を押え左手を高く舉げて誓つた、それは彼等仲間の宣誓の形式で厳格な不文律であつた。

「よし、そんなら明日俺が連れて行く酒場で水兵と見たら甘く誘惑するのだ」

ハリリーはXからの命令通りビーナに堅く言ひ含めた、ビーナは頷いて聞いてすべてに服従した、だが最後に

「そんな事して若しバレて警察に舉げられたら、どうなるの、死刑になるんぢやあるまいね」

と少し不安の眉を皺めて言つた。

「大丈夫だ、バレる氣遣ひは無い、すくなく共、お前たちが仕事最中にバレる心配は絶対に無い、仕事が済んだちお前たち何處かへ高飛びしろ、そうすれや一生涯安全だ、報酬二千弗だ、その外衣装は上等飛び切りつて奴、首飾りだの指環だのも一切買つてやる。こんな甘い仕事は探したつてあるもんぢやねえ」

「本當に、だけどそれ誰の云ひつけなの、アメリカ人かえ」

「そんな事、お前たちは聞かなくても好いんだ、アメリカ人であつたところで、それがどうしたといふんだ」

ビーナは黙つてしまつた、それからもう五六人欲しいが誰か適當な女は無いかとビーナに最初の交渉する事を誓はした、これでビーナはXの第三階の部下になつたわけであるがビーナはXの存在はもとより、彼女の最高幹部がXといふ人物それは恐らくアメリカ人では無い謎の男があるとは夢にも知らない。

妖婦の暗中飛躍

ハリーはそれから四日目で六人の女の部下を得る事が出来た、それは勿論ハリーの鋭い目で嚴重なメンタルテストを経た先づ理想的な女間牒だつたと云へよう。仕事は短時日だから彼女等に仕事の倦怠を感じさせずに済む事が何よりだつた、長の年月の間牒には到底彼女等のやうな無智でルーズな悪くすると捨て鉢で仕事を投げ出す危険のあるのは使へぬのだ。

Xにそれを報告すると

「左様か、お前でうまく配置してくれ、そして俺の命令を傳へてさい呉れ、ばそれで宜しい」

と言つたが

「皆、相當美人か」

と聞いた、ハリーは

「面は相當ですが腕と來たら十人力ですからコンデーションは良好でさア」

と笑つたがXは笑はなかつた。

酒場の主人やバーテンダーとは馴染みが多いので造作なく彼女等も入る事が出来た。六人をそれくゝの酒場へ向けたがビーナとも一人、六人の中で一番美人で伶俐な娘でケネスといふのを水兵の最も大勢來る、ギランドとドルマンの酒場の所屬にした、そしてハリーは毎日それらの酒物を廻つて見て彼女等の行動を監督してゐたのだが中々、魚が網にかゝつて來なかつた。

愈々艦隊が抜錨近くなつたと見えて水兵の上陸が頻繁になつたある日、ハリーは例の通り酒場廻りをしてビーナの居るドルマンの酒場へふらりと入つた、其處には白いジャケツの水兵で一ぱいだつた、ビーナの甘つたるい疇高い聲が響いてゐるのだ、隅のボックスに小さくなつてジンのグラスを嘗めてゐるハリーを誰か

見ても波止物人足としか見るものが無かつた、水兵達は彼の居る事を元より無視してゐた、ビーナは餘程酒を飲んだか顔を眞赤にしてビーナを取り圍んでゐる五人の水兵に萬遍なく媚を振り蒔いてゐた、水兵達はビーナの進め上手で大分飲まされてゐたらしい。傍にゐた一人の若い水兵の肩へ手をかけて垂柳掛つてゐたビーナはふら／＼立上つてジンの瓶を棚から取つて來た、そして口を抜くと一息に瓶を口にして飲んだ、水兵たちは拍手し足路みをして喜んだ、彼女はどかりと椅子へ腰を下さす醉眼をとろりとさして、猥雜極まる歌を歌ひ出した。

妾しが亭主と別れた時にや

その歌に相應しい淫らな表情が酔つた水兵共の血を湧き立たせるものであつた皆がビーナの顔を猥らな眼付で瞞めてゐる、その隙にビーナの右の掌にチラと黒い紙色が隠されてゐたがその掌が瓶の口を蔽ふた、と見るとビーナはいきなり立上つて片手の瓶を無暗に振り動かして

「妾の大好きな水兵、妾は今日大變嬉しい諸君にこの酒を妾が奢ります、皆んな飲んで頂戴、解つた？」

「ブラボー」

水兵共は恐悦して拍手して足踏みした外のボックスにゐて水兵共まで立上つてビーナのボックスへやつて來た、ビーナはグツと喇叭飲みをやつた、先刻からこの様子を中心に見てゐたハリイはハットした、ビーナ奴、本當に酔つ拂つたのか知ら、あの劇薬の酒を自分で飲むとは何んて奴だとハラハラして見てゐるより外なかつた、が事實飲みはしなかつた飲む振りして一端口へ入れた奴を又瓶の中へ逆戻りして瓶を口から離したといふのであつたが、一時はハリイを驚かしたのでそして片ツ端しからビーナが瓶を持つて水兵共に喇叭呑みで一口づゝ飲ませた周圍の十人位はそれを飲んだので、多少味が變であつても酔つてゐるしこの場の空氣に浮かされて誰もそれを氣付くものは無かつた、ビーナの口をつけたお餘りの

酒を飲む光榮に喜んでゐる甘ちゃんばかりだつた、ハリーはそれを見ると静かに扉を出て、にやりと底氣味悪い微笑を洩らした。

ケネスも亦凄腕を振ふ

ビーナの巧妙なトリックにすつかり満足したハリーは翌日ギヤラントの酒場で美人のケネスの偉大な殊勳を認めて更に感歎したのであつた、ハリーは昨夜のビーナの事を詳しくX氏に報告してから威勢よくギラント酒場へ顔を出したのであつた、酒場はドルマン程には客は居なかつた、水兵がほんの二三人切りだつたのでハリーは失望を感じたがケネスが一人の海軍下士官の制服を着た男と肩を抱き合つてゐたのを目撃すると緊張した、下士官は何やらケネスに囁やいては好色らしい目付きでケネスの顔を見てゐた、ハリーは彼女等のボツクスをよく見透せる處を撰んで腰を下した、そして顔馴染のパーテンダーと冗談を云ひ乍らカクテル

グラスを手にしながから絶えず視線をケネスの方へ向けた。

ケネスはちらと此方を見て微笑んだが直ぐ下士官に話かけた、下士官は大分酔つてゐるらしいのだ。

「こりやあ、少し大物だが、ケネスの腕前ぢやどんなものかね、甘くたゝいて埃を出して呉れりや好いが」

とそれは胸の裡で、表面何食はぬ顔してグラスを嘗めてゐたのだ、ケネスと下士官は何か小聲で話をしてゐるのだがハリーの處までは聞えないのだ、唯下士官が手真似をしてケネスへ何か教えてる様な話振りで、ハリーは、奴さん、艦の中の事を説明してゐるんだな、ケネスの綱に引掛つたものと見える、ケネス、しつかりやつて呉れ、と胸の中で聲援してゐた、下士官はそんな事とは露知らず熱心に話してゐるのだ、ケネスは亦ケネスでいかにも感心したやうに聞いてゐる。

「甘い、甘い、ケネス、その意氣だ」

ハリーは微笑したが何で微笑してゐるのか誰にも解らないのがハリーには一層愉快がらした。

それはかなり長い間だつた、下士官は其間にしきりに酒杯を口にしてゐた、次第に下士官の様子が淫らがましくケネスにじやれ付いて來たがケネスは巧みにそれを綾なして下士官をじらすのだ、やがて下士官は餘程酔つたらしく、よろよろと立上つた、ケネスは

「あれ、危ない」

と大きな圖體の下士官を助けてパーテンドーに小聲で何か囁いた。パーテンドーは無言で頷いた、するとケネスは態とハリーの居るボックスの傍を通りながらそつと知れないやうにクキクした。

「ハ、ア、奴さん、何處かへ唾を吐き込めな」

ハリーは彼女等が扉を出ると自分も急いで立上つて戶外へ出た、自働車が止ま

つてゐる。彼女は一寸後を見てハリーがゐる事を知ると、

「あの、チエリー、ホテルまでやつて頂戴」と態とハリーに聞えるやうに云つた。

自働車へ圖ぶ六に酔つた下士官を乗せてケネスはそつとハリーの方を見ながら乗つてしまふと自働車はガソリンの匂を後に走り出した、行先は解つたハリーはぶら／＼と河岸づたひにチエリー、ホテルの方へ足を運んだ。

チエリー、ホテルの附近を迂路付いてゐるハリーは何とかして彼女等の居る室へ近づき度いものだと考へてゐたがその心配は要らなかつたのだ。

ふと二階の窓を見上るとケネスは先刻から顔を出してゐたらしい。ハリーは知らん顔してその窓下へ寄つて行くと、ケネスはさつと何か物を落として、すつと顔を引込めた、ハリーは急いで拾ふと後も見ずさつと歩き出した。そして其儘住家へ戻つて、X氏の部屋の扉をノックした。

「カムイン」

ハリーが入ると、X氏はロツキング、チアでぼんやり煙草を吹かしてゐた。

「これ、手に入りました。下士官らしい奴の懐中から出たもんです」

半巾に包んだものをX氏へ渡した、半巾を開けて見るとそれは皮表紙の手帳だつた、X氏は注意深く手帳の裏表を眺め廻してゐたが中を繰つて見てから

「大したものが入つたね、直ぐ元の場所へ返戻しなければならんものかね」

「さア」

ハリーは先刻からの一伍始什を話した。

「では返さず貰つて置かう、ではも一つ仕事が残つてゐる」

X氏は小聲でハリーの耳へ囁いた。

ハリーは充然と頷いてX氏は手を差出した。

「甘くやつて呉れ給へ、こんな物もう一つ二つ持つて来て呉れ給へ」

と云つてハリーの方は見ずに戸棚のところへ行つて鍵を明けた。

米艦隊の一頓挫

某月某日、某港を抜錨して大西洋上の某基點で新兵器を縦横に使用して大演習を舉行すべき筈の米國の某艦隊はその機密の抜錨豫定日の變更を餘儀なくされたそれは艦隊司令部幹部と海軍省の間で大變狼狽した事實だが世間には勿論何も知れる筈は無かつた。

と云ふのは艦隊各艦隊の水兵や下級軍屬員が各艦十二三人宛多い艦は二十人も何かの中毒で非常に苦しみ出し、殆んど重病状態になつたからである、それで重病患者を乗組まして遠く海洋へ航海する事は不可能であつた、患者は早速海軍病院へ移したが斯く多数患者を出したのに付いて當然缺員が出来た。

艦隊司令官のマーベル中將は不機嫌な顔をして、

近來の下士官や水兵は餘り放從に流れ過ぎる、將來はもつと嚴格な規定を持つて上陸其他に制限を設けなければいかん、米國海軍の威信に關する」と艦隊司令部幹部將校に小言を云つたといふ事である。

するとニユーヨーク、ヘラルドに

「巡洋艦ミスシツビー號の下士官、上陸中行衛不明、脱艦の疑ひあり」

×月×日巡洋艦ミスシービー號乗組、砲術下士官、ゲリー、コンゼー、二十九歳は上陸、河岸通りのギラント酒場に於て飲酒し、キャバーレーの踊子、ミス、クネスと相携えて出でたる儘、遂に今日に至る迄歸艦せず、或は大演習を控えて戰闘的勞務に服するのを不満で脱艦せるにあらざるやと思はる、同人は以前より大酒家にして往々失錯せる事あり、ミスクネスはギラントに於て有名なる踊子なり、目下コンゼーの行衛嚴探中、尙ほ同艦隊は重大なる意義を有する大演習を控えて他にも不詳事勃發して當局大いに狼狽せる由」

こうした記事が世間の明るみへ出された。

その朝の新聞を目に通したX氏は人知れぬ意味深長な笑ひを口邊に浮べて、

「まだまだ、これから大事な仕事があるのだ」と呟いた。

浮世繪を賣りに來た日本人

ある日の午後、ヘンダーソンの店へ一人の日本紳士が訪れた、身装は質素な一見、學者らしい三十七八歳の色白で東洋人としては鼻の隆い聰明な顔の紳士だつた。彼は一と包みの浮世繪を携へて、ヘンダーソンに買つて呉れないかと申出た。「一應拜見しまして、お價段の折合ひがつかつたら、お引受しても宜敷う御座います」

とヘンダーソンは好きな道とて直ぐ包みを解いて凡そ四五十枚の浮世繪を一枚

一枚叮嚀に鑑賞した、歌麿、清長、豊國、國貞、北齋、廣重等だつた、浮世繪では目の肥えてゐるヘンダーソンが見てもいづれも初版もので優物揃ひだつた、其處で忽ち賣買が成り立つて全部引取る事にした、全部の金額五百弗と云ふので折合つたが、金銭の授受が済んだ後でもヘンダーソンと日本紳士の間にお互の蘊蓄を傾けて日本浮世繪論を交換してゐた、が日本紳士は

『まだ宅にも小幅の掛軸や佛像なども少しはありますが』

『それは是非拜見したいものです、貴方のお所藏なら立派なものに相違ありませんよ』

『貴方が宜しかつたら宅へお出で下さい、何時でも喜んでお目にかけてますよ』

『左様ですか、ではお伺ひ致します、最近の中に伺ひ度いのですが、宜敷う御座いますか』

『え、何時でも、何なら今日でも宜敷い』

『いや、全く、私も好きなものですから、好物があるとなると一時も早く拜見したいのですが、晝間は店を明けるわけには行きませぬので』

とヘンダーソンは残念そうに首を振つた。

『それならば夜なら尚ほ私は都合が宜敷いのです、夜はいつも宅にゐますから』

『失禮でなかつたら今夜お訪ね致しますか』

『是非、おいで下さい、ゆつくり私の書齋で骨董のお話しやうちやありませんか』

斯うした約束して日本紳士は歸つて行つた。その後でヘンダーソンはコッブスに、

『あの日本紳士は美學研究のプロフキッターだね、俺はそう思ふよ』

と云つたがコッブスは氣の無い顔で

『左様かも知れませぬ』

と答えて卓上の小佛像の埃を掃除してゐた。

アパート内の密談

ヘンダーソンの店に浮世繪を賣りに行つた學者型の資素な日本人、それは誰であるかと言ふと、今迄X氏といふ假名に隠れた謎の怪人である事をこゝらで正體を現はそう、だが名前は飽く迄もX氏で通して話を進めた方が便宜上宜敷いのだ。X氏はあの陰惨な川向ふの裏街の隠れ家から、これは亦雲泥の相違のプチブルの住宅地になつてゐるこの街の小綺麗なアパートの三階を借りてゐた。そして立派な書齋を持つてゐる、スタンドの放射する光の下で何やら美術書らしい書籍を開けて寫眞を見てゐると下嬢が客の來たのを取次いだ、客は勿論ヘンダーソンであつた、下嬢が去つて扉をびたりと閉めると二人は中央の卓へ向ひ會つてからヘンダーソンは

「何か急な御用でしたか」

「それよりコツプスの舉動をよく注意してるかね」

「それはもう此間貴方からあつしやられてから、日常注意して見ておりますが、彼もスパイだけあつて流石人目に觸れるやうな眞似しませんが」

「彼奴の素性は洗ひ上げたよ」

「何者ですか」

「あれは君、ワシントンの米國間諜部から派遣された腕利きの、ビル、ダイローといふ奴さ、どうも君の開業前から君とその聯絡方面を睨んでゐた仕業らしいが此方もそのつもりで彼奴を一つ逆用してやろうと思つて今日實は行つたわけだ、奴の事だから感付いてゐるかも知れん、今頃このアパートの附近にスパイ網を張つて鶉の目鷹の目で潜んでゐはしないかな」

X氏はそう云ひ乍らも一向不安な様子は見えなかつた。

「然し、それでも邪魔物ですな」

「まあ、好いさ、俺にも策がある、彼奴を一つ、女で巻き込んでやらう」

「さア、案外堅物らしいんですが」

「いゝ共、彼奴美男子ではないから今迄女にちやほやされた事はあるまい、一人適當な女があるんだ、君は店の忙しいのを口實に女店員の募集廣告を近日の中に新聞に出せ、そうしたら、早速、その女を差し向けるから、その女は美人で若くて、柘榴石の指環を填めてゐるんだ」

「宜敷い、やつて見ませう、丁度、好都合には此間から女店員を一人雇はうかと云つてゐた處ですから」

「それはそれでよし、君は下院議員のベンサムがちよくちよく君の店へやつて来る相だが、甘く彼の男を近づきに成つて呉れんか」

「えゝ、それは大丈夫です、ベンサムは大分骨董が好きでよく話が合ふんですか

ら」

「そして彼と交際すると同時に彼氏の夫人とも仲好しになつて呉れ、これが必要な事なんだ」

「は、あゝ出来ますか、どうか……兎に角努力します」

「ではもう仕事の話はこれで打ち切つて、別な世間話をしやう、骨董談かな」

X氏は微笑した、然しヘンダーソンは重い任務を負つた彼自身を思つて、しきりにその計畫で心を悩ましてゐるらしく考へ込んでゐた。

ヘンダーソンはその夜遅くなつてから第五番街の彼の宅へ歸つた、その彼の自働車の後を追跡する一臺の自働車のある事を彼は知つてゐた。

「矢張、X氏の云つた通り、俺がX氏の隠れ家へ行つたのを知つてたと見える」と心中穏かならぬものがあつたが背後を殆んど見もしないで悠々と歸宅した。

X氏の失踪

ヘンダーソンが帰宅してX氏の命令通り實行にかゝつた、募集廣告に應じて職業婦人志願の女がヘンダーソンの店に詰めかけた、ヘンダーソンはそんな女達には全く用が無いのだが表面如何にも採用しそうな顔してテストをした。

「柘榴石の指環の女はどれだろう」

とそれを捜してゐた、ミス、ケネスと稱する二十一二歳の金髪の美しい女があつた、指には柘榴石の大粒なのを入れた指環を見てケネスだと解つた、それで翌日からケネスはヘンダーソンの女店員として出勤する事に定つた、その日の朝早く出勤したケネスは、コツプスのまだ来ないのを幸ひに、ヘンダーソンの顔を見ると小聲で

「お早う御座います、あのう、それからハリーさんから言傳てを頼まれて來たの

ですがX氏とおつしやる方がお國へお歸りになつた相です」

「えッ、そうですか」

ヘンダーソンは自分も身邊に危険の迫つて來たことを感じた、それにしてもX氏は餘り無責任のやうにも思はれた。

コツプスとケネスとは毎日同じ店に勤めてゐるから自然若い者同志の事として親し味が出て來た、ケネスは一見令嬢風の清楚な美人だつた、それがコツプスに特に厚意を見せる様な風を示すのでコツプスも満更でもない様子だつた、如何に慧眼なコツプスも全くケネスの素性は知らないらしいのだ、ヘンダーソンはそれを見て見ぬ振りをしながら心中秘かに喜こんでゐた。

やがてコツプスはケネスをオペラ座に招待する程になつた、ケネスは元より思ふ盡で喜んで快諾した事は言ふ迄もない、土曜の店が退けてから、コツプスはドレスを着てすつかり粧し込んでケネスの住むアパートへ自働車を運轉して迎えに

来た、ケネスは腕によりをかけて眩しい程美しく化粧し、素晴らしい黒の夜會服を着て嫣然して出て来た處は紐育一流の社交界に出てもひけを取らない程氣品のある美人に見えた、コツプスは今更ケネスの美しさに驚いて、こんな美人を連れてオペラ座のボックスに納まる處を想像して若い血を燃え立たせるのだつた。

オペラ座へ着いてからも二人はすつかり婚約中の戀人のやうに睦まじ相に喃喃と私語を交したのだ、出し物はトリスタンとイソルデだつたがコツプスは舞臺よりも隣席のケネスの方ばかり氣になつて胸中。ケネスと將來婚約まで進める甘い計畫に餘念なかつた。

オペラが閉場てからコツプスは自分の自働車に乗せてケネスを家まで送つてし舞ふのが何だか物足らなかつたので

「ケネスさん、宜敷しかつたら、これから軽い夜食を御一緒に食べたいと思ひますが、如何がです」

と恐る恐る申出た、するとケネスはちよつと躊躇する様子を見せたが

「いえ、お伴しますわ」

「どうも有難う」

そこで自働車をレストラン、バシフェックへ横付けにした、オペラ歸りらしい美裝の男女が廣い石段を潮のやうに上り下りてゐた。

ホールの鮮かな卓を撰んで二人は席に付いて飲物と軽いランチを注文した。そしてコツプスはケネスの機嫌を取るやうに話しかけてゐた。

「貴女と斯うして一緒に食事するなんて、僕も幸福な男ですな」

「うう、妾だつて今夜本當に嬉しいのよ」

「ハハハ、貴女が今夜満足して下さいましたか」

「え、貴方がオペラに誘つて下さつたので、飛び立つ程嬉しかつたの」

斯う云ひながらコツプスの顔へ媚のある目付を送つたのだ、コツプスに取つて

は無上に楽しい會食が終つて自動車でケネスのアパートへ送つた、ケネスは自分の室へ上つて休んで行けと言つて呉れるのを期待したが、ケネスはあつさり、

「コッブスさん、どうも有難う、では御機嫌よう」

と手を差し伸べたので、コッブスは軽い失望を感じたが、その手を強く振つて「御機嫌ようお休みなさい」

と云ふて、名残惜そらに自動車を後戻さした、ケネスはそれを見送つて呉れたのはせめても心遣りだつた、コッブスの去つた後でケネスは、

「矢張り、男つて甘いものね、到々妾の網に懸り相だあ、今夜はこれ位にしてやると返つてあの男が逆上せて来るのだ、然し案外手取早く、使命が果せ相だわ」と呟いた。

重大任務

コッブスはそれからケネスにすつかり心を奪はれて仕舞つたのだ、彼の重大な使命は勿論意識はしてゐたが、彼の精神力はケネスにはかり働きかけるのだから任務は段々御座なりになり細心な注意を拂ふ氣にならなくなつて来た、オペラ座見物以後二人は親し味が増したやうに見えた、それからコッブスは土曜とか日曜に散歩や観劇に必ずケネスを誘つたが、ケネスは肝心の一歩手前でコッブスに乗る隙を與えないのだ、だからコッブスは當更、焦燥を感じて来るのだ、ケネスは段々思ふ壺に填つて来るコッブスが莫迦者のやうに見えた、こんな男が米國政府のスパイかと輕蔑したくなつて、すると妾の方がスパイとして餘程豪いわたしつた、ところが或る晩アパートへこつそりハリーが訪れて来た。

「おや、突然いらつして何か御用なの」

「うん、一つ、うんと云つて貰ひ度いんだ」

「何です」

「大分荷が重いんだが、うんと云つて呉れるか」

「何です、一體」

「これはXさんの命令なんだが」

「アラ、Xさんまだ紐育にゐたの」

「あゝ、一時行衛を晦ましたんだが、ちやんと紐育にゐるんだ、然し俺もXさんの今の住所は何處にゐるか知らねえんだ」

「それで重大な用件といふのは」

「それだ」

ハリーは煙草へ火を付けて、ケネスの顔を見守つたが

「今度は少し難しいんだが、お前さへ、うんといつて呉れりや好いんだ」

「何にさ、一體、氣を持たせないで云つてお呉れよ」

「實はな、コツプスと結婚して貰ひたいんだ」

「えッ」

ケネスは目をぱつちりと開いてハリーの顔を瞞めた。

偶 結 婚

流石にケネスはその命令に驚いた。

「だつて」

「そりや、相だ、然し其處をうんと云つて貰ひたいんだ、是非やつて呉れ、何せお前の色化掛けでコツプスに泥を吐かせるにや暇が入るんだし事は急いでゐるんだ、何でも手取り早くやらんと、途中でバレて見な、元も子も無くしてしまふんだから、思ひ切つた冒險をやつて貰ひたいとX氏からの依頼だ。結婚だつて三月程で、出て来て好いんだ、その代り報酬は莫大だぜ、おい二萬弗だよ、そして持參金にして、お前の好きな人、ジョーシへ押かけ嫁に行くが好いや、俺がよくシ

ヨージへ渡りを付けてやる、どうだ、これでもうんと云へねえか」

ハリーは俯向いてゐるケネスの顔を覗き込んで熱心に説いた、二萬弗と好きな男を餌にしての頼みに到々ケネスは承謀したのだ。

「そう定つたら早い方が好いぜ、甘くコツプスの奴に結婚の申込させる様にしろよ」

と云つてハリーは二千弗の現金をケネスに與えて戻つて行つた。

ケネスは、その氣になつてコツプスへ近づいて行つた。コツプスはそんな恐ろしい巧みがあるとはスバイの彼でも戀に目が眩んで露疑はず、此方の思ひ通り結婚を申込んだのだ、ケネスは流石に女氣で濟ないと思つたが自分の重大な任務のためを思つて強い覺悟を持つて承諾してコツプスを有頂天にさした。

「妾、貴方と一緒にゐるんなら一日も早い方が好いわ、そして主婦として家庭の中で生活したいのよ」

「そうですか、有難う、では早速結婚の運びを付けます、では貴女はヘンダーソンの店を退くのですね」

「えい、貴方と結婚する事に定れば直ぐにも店を退きたいわ」

「それが好いですね、あの店に貴女が長くいらつしやる處ぢやありませんよ」

「アラ、何故ですか」

「あの主人はいけない奴なんです」

「でも、善良な商人ぢやありませんか」

「どうして善良どころか、こんな事貴女に云つて好いかしら」

「聞かして下さいよ」

「これは貴女にだけ云ふのですよ、どうか絶対他言しないで下さい」

「いゝわ、人になんか言はないから」

「あれは賣國奴です」

「まあどうして」

「ちやんと證據が上つてゐるんです」

「だつて」

「貴女は信じられんでせう、僕がその證據を押えてゐるんです、だから彼の男は最近捕縛されますよ、貴女はそんな處にゐると嫌疑で引ばられない共限らない」

「まあ、嫌ですわ、妾そんな事」

「だから直ぐにも暇を取つた方が安全です」

「でも貴方はどうなるの」

「僕ですか、僕はその點絶對安全ですから心配しないで下さい」

ケネスはその時急にコツプスの兩手をひしと握つて

「お止しなさいよ、若し嫌疑で貴方が引張られたら、妾どうなるの、貴方も早くあの店を出て頂戴」

「大丈夫です、僕は決してそんな事ありません、何故ならば……まあいづれ詳しい話は結婚後どうせ貴女に打明けて僕に助力して貰はんけりやなりません、兎に角安心して下さい」

若い間牒には女で籠絡するに限るといふのは此處だ、然しケネスが美人でなかつたら斯う迄なるまいもの、コツプスの千慮の一失、千丈の堤を蟻穴で崩れるといふのはこの事だつた。

警官隊の徒勞

その晩直ぐハリーの處とヘンダーソンへコツプスの云つた事を報知した、その傳令にはビーナにやつて貰つた。そしてその翌朝態々辭職の届けを郵便でヘンダーソンに送つて置いて彼女自身、顔を出さなかつた。この報知を受取つてハリーとヘンダーソンはそれ／＼潜行的に前後の處置に奔走したのだ。

それから一週間程したある深夜、第五番街を自働車三四臺で飛ばしヘンダーソンの店を襲ふた警官隊が寢惚けてゐる下嬢のフアナガゐる切りで居室にも寢室にもヘンダーソンを發見する事が出来なかつた計りでなく、家内隈なく搜索したが秘密な書類らしいものの影も無かつた。何がなんだか解らなくて唯、恐怖に顫へてゐるフアナを厳しく訊問したがもとより彼女は知る筈もなく唯だ、今夜旦那は晚餐をされたのは確かだと誓つた。

すると今夜の警官隊の襲來を豫想して晚餐後逃亡したものと推定された。それにして張込まして置いた私服警官はヘンダーソンの外出を見たものは無かつたまんまと一杯食はされて警官達は引上げた、それをコップスが聞いて地駄太踏んで口惜しがつた。

一體誰が彼に密報して逃がしたのだ、現在自分の婚約の女が自分を正反對の立場にゐる敵とは知らないで外にヘンダーソンの身邊の人間をあれこれと數えたが

解らう筈はなかつた。

その後コップスはケネスに會つて、

「ヘンダーソンは到々捕らなかつたよ」

「アラ、よく逃げたのねえ」

とケネスは無邪氣に云ふではないか、そう云ふ人が逃亡さしたとは夢にも思へない。

そうしてコップスとケネスは立派に教會で結婚式を挙げた、ケネスの身元證明は何處でどうしたものか前身の街嬢の素性が全く隠れてオレゴン洲の中産農家の眞面目な娘になつてゐるでは無いか、これはX氏の手から出た巧妙なトリックであつた事は想像に難くない。

コップス事、ダイローの妻になつたケネス二人は表面、新婚の夫婦の誰でものやうに甘く嬉しく楽しかつた、尠く共コップスはそれに違ひなかつたがケネスの

胸の中は果して如何だつたか然し、その方面で男を綾なす事は小娘時代からの修業で滅多に化の皮を露はす様なへまはしなかつたのは流石にケネスだつた、ビーナは凄腕の一面情熱家で男に惚れッぽかつたからこうした根氣の入る重大な仕事には向かなつたのだ。

神謀鬼策

こゝで話をX氏の身邊の策動に移そう。

且つて失踪してヘンダーソンを驚かしたX氏は其後紐育の某方面で健在で縦横の奇策を弄して驚異に價ひする成果を擧げてゐた。例の艦隊の水兵の中毒事件から其後の取るべき巧妙な手段も立派に成し遂げてゐたといふのは艦隊のコックやボーイの中毒して水兵達と一緒に海軍病院に収容されて、その缺員の補充を募集した時水兵上りの男をハリーの手で買収してコックやボーイに仕立て、甘く艦へ

乗組した、勿論それは彼等としては豫想外の大金を與へる條件を以てした、大演習を終る迄の短期間に各一萬弗の報酬を與える契約が秘密に取り交はされて着手金として三千弗の金がその間牒等のポケットに入つたのだ、彼等は金の前に國家も正義も何もなかつた、これは一つはアメリカ人の一にも二にも、金といふ事が頭にしみ込んでゐる故であつた。

その成績は素晴らしいもので豫期以上の成績を擧げてくれた、何故水兵上りの浮浪人を使つたかと云ふと彼等は少しは軍艦の専門的智識があつたからである、然し一つ間違へば軍人上りだけに勇ましく軍艦内の生活に國家觀念を蘇み返らせて寢返り打たれるかも知れない。危険はあつたが、矢張彼等は貧乏して放浪して一片のパンにあり付けないでゐる時に國家が食はして呉れないが金さへあればといふ了見で下手に國家主義に轉換するものはなかつたから此方に取つては幸ひであつた、一體に日本人程國家觀念の強烈な國家に對して忠誠な國民は他にないのだ

それから最も驚異すべき事は、あのドルマンの酒場でケネスにまんまと誘惑されたミスシツヒーの下士官のゲリー、コンゼー、この男が、ケネスに、チエリーホテルで手帳を抜き取られて遂に歸艦出来なくなつて、脱艦したのが新聞に迄書かれたが、この男がちゃんとハリーの隠れ家に居候をきめ込んでゐるのだ、彼も今は日蔭の身だが、どうしてハリーと同居してゐるのか。

これも神謀鬼策のX氏の差し金だつた。X氏は實に恐るべき天才だつた。

どうしてハリーが彼を自分の家へ連れて来たか、それはハリーの話に依つて明らかだ。

それはハリーがX氏へあの手帳を手渡して直ぐ引返してチエリー、ホテルの附近をぶらついた、少時経つてコンゼーが非常に狼狽した様子でホテルを飛び出すとハリーはその跡をつけた、そしてコンゼーがその夜の明け方頃まで河岸通りを首うなだれてさ迷ひ歩くのを見え隠れにつけて、とうとう橋から投身したが海軍

の下士だけに泳が出来て死ねないでゐる處をハリーは舟を出して助け上げて彼の投身の理由を誠實らしく問ふたのだ。そして、ハリーは

「何も死ぬ事はねえ、世の中を恐がつちやいけねえ、兄弟、今から俺の家へ來ねえ、そして俺達の仲間になんねえ、堪らねえ面白い事もあるよ」

「君は俺を助けて呉れるか」

「そう共、引受けたよ」

そうしてハリーはコンゼーを先づ住家へ連れて來たのだ、そしてX氏の命令でコンゼーから、充分吉報が得る事に成功したのだ。

機密漏洩

ケネスと新婚のない夢圓らかなコツブス事ビル、ダイローが美人の上。腕の凄
いケネスに巧みに掌中に丸め込まれて、青年を純潔に過ごした丈に、返つて他愛

なかつた。そして自分の國家的秘密任務を最愛の妻、ケネスに打明けた事は無論である、ケネスは何喰はぬ顔で夫の仕事に興味を持つた顔して種々聞き出したからコツプスのビルは、言つてはならぬ範圍まで飛び出して何も彼も話したのだ。それは煙突掃除夫に化けてビルの家に入るハリへ報告され、X氏へ伝えられた、非常に有効な材料は米國牒報部の組織がかなり明瞭に解つた事は實に有利だつた。

然しこゝに到々ケネスに一大危機が來たのだ。

それはある日だつた、今は牒報部へ内勤するビルが退應時間が來たので一刻も早くケネスの待つてゐる楽しいわが家へ歸ろうとして、書類を嚴重に整理して金庫へ入れてゐると、牒報部の幹部、ダマス、クライプトン氏が室内へひよつこり入つて來て

「ダイロー君、仕事が濟んだら私の部屋へちよつと來て呉れ」

「はア」

ビルは亦、何か特別使命で外部へ出て働くのかと思つてゐた。

書類を金庫に入れて嚴重に符號を合はして鍵をかけると、その鍵を手にしながらビルはクライプトン氏の室へ出掛けた。

「何か御用ですか」

クライプトン氏は冷靜な哲學者風な顔に一抹の憂鬱な影を宿してビルの顔をちらと見ると手を差して椅子にかける事を命じた。

「ダイロー君、君に聞きたい事が出來た」

「それは何です」

「君と君自身の周圍に關してだ」

とビルの顔を見守つた。ビルは思はず不安に胸を轟かした。

「私の周圍に關して？」

「そうだ」

「それは一體何事でせうか、私は誓つて御注意を受けるやうな事はしないつもりですが」

「成る程、それは尤もだ、だが人間、神でない限りはねえ」

クライプトン氏は思入深かげに云ふのだ。

「何事でせうか、云つて頂きませう」

「君、君に取つては異常な重大問題だよ」

「何です」

ビルは不安にきつと唇を引締めて卓へ乗り出した。

「君の夫人に關しての事だがね」

「えッ、あのケネスに關して？」

クライプトン氏は靜かに頷づいた。

「實に君にはお氣の毒だよ、君の夫人のケネスさんの事に就いて確實な情報が一三の方面から入つて來てゐるのだ」

「そ、それはどういふ事です」

ビルは紙より蒼くなつてクライプトン氏の顔を凝視した。胸の中で、

ケネスは俺と結婚前に情夫でもあつたのか。

最愛の妻？ 憎むべき敵手？

「君は君の夫人がどう云ふ方であるか知つてゐるかね」

「私は妻のケネスの事はすべて知つてゐるつもりです。他の誰よりもです」

「そうかも知れないが、又、他の誰よりも何とも知らないとも云へるね」

ビルの真向な態度にクライプトン氏は少し皮肉になつた。

「それはどう云ふ事をおつしやられるのですか」

「宜しい、では何も彼も君の前へ云はう。君はこの秋、ミスシツビー號の下士官
コンゼーと云つたが、あれが脱艦した事件を知つてゐるね」

「知つてゐます。新聞にも出ました」

「あの男を誘惑した女を知つてゐるか」

「あゝ、ストリーガールでせう」

「うん、あれの名がケネスと云つた」

「何んですつて、貴方は私の妻を侮辱なさるんですか」

拳固を拵えてビルは椅子から立上るとクライプトン氏に詰め寄つた。

「冷静になり給へ、ダイロー君、僕はこんな事、云ふのは大それた遺憾だが、あの
ケネスといふ女を、ダイロー夫人ケネスと全く同一人である事が確實に解つたの
だ」

「そ、それは本當ですか」

「嘘であつたらどんなに僕は喜ぶだらう」

「そ、そ、そんな」

「有るべき筈はないのだが、事實は動かされぬ、ダイロー君、君の慧眼で観破出
來なかつた事は惜しい、これを見給へ」

傍らから書類の束をビルの前へ押しやつた。

ビルはその書類に目を通した。

「ケネス、ローランド……、ケンターキー生れ、……娼婦……某國スバイの手に
買収されて、ドルマン酒場に於て巡洋艦ミスシツビー號乗組、准士官コンゼーを
誘惑、彼を脱艦の止む無きに至せたる證據歴然たり、その後、第五番街東洋古
美術商、ジョンズ、ヘンダーソンの女店員として勤務し、コツプス事、ダイロー
氏を籠絡せん事計畫せり、現在ビル、ダロー氏夫人として常に夫より機密を聞き
出して、一味の者に詳細報告しつゝあり」

ビルは讀んで居る中、驚愕のために荒い呼吸をした。

「どうだね、俺は何も云はぬ、君自身の手で解決して呉れ給へ」

ビルは卓上の書類を睨んだ儘無言で呼吸をはずませてゐた。

クライプトン氏もこの若者の胸の裡を思ひやつて無言であつた。室内は全く人無い森の如く静寂だつたが、扉の外でコトリと幽かな物音も此の場合、氣にするには餘りに嚴肅な室内の空氣のため聴き逃がされたのであつた。

漸く葉卷の煙りを無意味に吹かしてゐたクライプトン氏は重く沈んだ聲で斯う云ふのであつた。

「で、ねえ、ダイロー君、夫人は今夜中に警察に招換されるかも知れんよ」

「左様ですか」

ビルは悲痛な聲でそれはやつと聞える位の小さな低い聲だつた。

「或はもう警官隊が夫人を護衛して連れて行つてるかも知れん」

「何と云ふ事だ」

「君は夫人に、どういふ事を話したかね、それが第一に聞き度いのだ、よく冷靜になつて順序よく話して呉れ給へ」

ビルは首をうなだれて無言だつた。

「では俺が聞こう、君は君自身の嚴重機密に屬する身分を打ち明けたのは何時だつたかね」

「結婚前でした」

「そして君の過去の任務に付いて詳細に話したかい」

「それは話しました」

「この國務省機密所屬の牒報部の組織の事は」

「それも話しました」

「人員やそのメンバーの名や、その任務に就ては？」

「それも概略、話してやりました」

「うむ、それではこの牒報部の機密を全部話したやうなもんだ。詳しく、夫人に話した通りを今、此處で話して見給へ」

クライプトン氏から訊問されて法廷に立つた被告のやうに、すべてケネスに聞かした通りを此處で復習しなければならなかつた。

そうして時間を暇取つてゐる中にケネスを警察にアゲさせやうといふクライプトンの腹だつた。

警官がダイローの留守宅へ出向いてケネスに面會を求めた。ケネスはさすがに顔を蒼ざめて、それを無理に押し隠して、

「何の御用ですか」

「少しお訊ね致し度い事がありますので警察まで御足勞お願ひしたいのです。夫人」

「アラ、何の御用でせう」

「それは、私共に解らないのですが署長がお訊ねし度いと申しておりますので」

若い春廣の警察官吏は丁寧な言葉遣ひで頼んだ。

「明日にして頂けませんでせうか、主人とも相談して見ませんか」と

「極く急を要する事だそうで、お手間は取らせませんから、ちよつとおいでを願へれば私共も役目が済みますので」

「でも、もう夜ではありませんか、こんな時刻に人を呼ぶなんて」

ケネスは飽く迄もこの危機を一時でも逃れやうとして、明日なら行かうとしきりに主張したが、事面倒と思つてか、若い警察官吏は遂にポケットから拘引狀を出して、

「こういう事になつておりますから、今夜是非おいでを願ひます。何大した事で御座いませぬ。私共はよく解りませぬけれど、御主人の處へ平常出入りする人物

の事でちよいとお伺ひしたいらしいのです」

と甘く欺してケネスをどうやら自動車へ乗せてしまつた。

其夜は勿論ケネスは歸宅を許されなかつた。そして二日経ち三日経つた。

ケネスの拘引の情報を逸早く手にしたのはハリーの一味だつた。苦しませられに女の口からべらべら饒舌られたち一大事だとはかりにハリー一味はその善後策を講じたのだ。それには誰か氣の利いた女を淫賣か搔つ拂ひで警察へ拘留させてケネスへの傳令にしやうといふトリツクが早速實行された。

その役目にはビーナが選ばれたのだ。

萬引のトリツク

ビーナは態と普通の萬引女のやうな貴婦人型の身装を整えて、紐育一流のデパート、モウンスへ出掛けて貴金屬品部で、八方破れの構えで誰でも直ぐ目に付く

やうに石入りの指環一個ポケットにした。

計畫は圖に當つて、男事務員は輕蔑と憎惡の表情で言葉だけは丁寧な。

「夫人、唯今の指環のお代は傳票に書上げて宜敷う御座いますか」

「何をです」

「今の指環です」

「妾、指環など知りませんよ」

「決して、不確實な事は申上げてゐるのではありません。傳票へ書上げますから出

納でお代を頂戴いたします」

「貴方は、妾の名譽に傷つけるのですか」

「は、、、、そうおつしやられると困りますね、では萬止むを得ません。店内の私

服警官に渡す外はありません」

ビーナは到々刑事の手に渡されて身體を調べられると、ちやんと指環は出て來

たので忽ち萬引女として警察に拘引されてブタ箱へ入れられたのだ。

然しそれは豫定の行動だつたからピーナは勿論平氣だつた。唯如何にして重大

犯人のケネスの獨房に傳言すべきか、その機會を窺つてゐた。同檻の女盜賊、エ

レオノに話すと、

『そんな事、わけは無いよ、お前さん、檻房の中でヒステリーを起こした眞似して、うんと暴れたり、食器を投げたりするんだね、そうすれあ、他の者が迷惑だ

と云ふので獨房へ入れられるんだ』

『獨房へ入るとケネスに逢へるのかい』

『うまく隣同志の獨房へ入れられるんだね、そうすると壁一重で、どんな話でも

出来るぢや無いか』

『甘く行くか知ら』

『まあ、それが一番、好い方法だらうね、やつて御覽よ』

ピーナは其の日から暴れる事にした。大きな聲で歌を唄つたり、衣類を引裂いて泣き喚いたり、器物を投げ飛ばしたりした。女檻に入れられた女は時々斯うしたヒステリーの發作をおこす事があるので女看守は又かと云ふ顔をして、獨房へ入れる事にした。手取りは取りして獨房へ連れて行かれた。ピーナは心中、甘く行つたわ、と思つた。

大聲で泣き喚いて暴れながら連れて行かれたので拘留の女たちは窓から眼を出して面白がつてゐた。獨房でも、皆んな、暴れる女の顔を見やうと、皆んな顔を出してゐた。

『ケネスは何處に居る』

とピーナは思ひながら見ぬ振りして注意した。あの瞳の美しいケネスの顔は。

それは間違なくケネスの顔だった。何處の女だらうと興味をおこして覗くと、それがピーナだったので屹驚して呼吸をつめて、どうして此處へ来たんだらうと云ふ顔付だった。勿論聲など掛けなかつた。

そして入れられた檻房はケネスの隣りであつたから何も彼も好都合だつた。看守たちが去つても向ふや、右隣りの檻房ではピーナが暴れ出すだらうと興味を持つて顔を小窓から出してゐたがピーナは檻房へ入ると寢臺へごろりと寢轉がつて静かにしてゐた。

一時間経つと、左の壁を極く幽かにコツコツと敲く音がするのだ。

『ケネスかい』

『ピーナ、どうして此處へ来たの』

隣の聲は囁くやうに小さかつた。それでも明瞭に聞えた。

『お前さんに重大な傳言があつてさ』

『妾へ傳言、お前さんそれで入つて来たのかい』

『そうさ、何も悪い事はしはしないんだよ、態と萬引女の眞似して刑事に引張られるやうにしたのさ』

『そうかい、妾、殺されるかも知れないんだよ、だから傳言なんて聞いたつて聞かなくたつて同じだよ』

捨て鉢な口調で呟いた。

『だからさ、お前さんを助けて上げやうと思つて皆んなが心配してゐるんだよ』

『何にか、妾を救ひ出す、好い方法があつて？』

『あるらしいんだよ』

『でも警戒がとても嚴重なんだよ』

『大丈夫、どんな嚴重な警戒だつて、妾がこうしてお前さんに傳言するやうにちやんと来たぢや無いか』

「それも、そうね、それでどうして妾を助けるつもり？」

「それより、一番大事な事は、お前さん、少し辛かるうけど、決して口を割つてはいけないとそれを誓へつて、總ては法廷へ出て何も彼も白状すると言つてさ」

「さうかい、妾の間から二三度、調べられたけどまだ泥を吐かずにゐるんだよ、でも拷問でもされると言つて仕舞ふかも知れないと自分でも不安なんだよ、でも結局は殺されるんだわね」

「大丈夫だよ、吃度救ひ出して見せると皆んな一生懸命なんだよ、好いかい、お前さんが裁判所へ送られる時、途中でお前さんを助けるんだとさ」

「それ本當？」

「ハリー達を信頼しておいで、この建物の周囲を皆んなで監視して外からお前さんを守つてゐるよ」

「あゝ、妾が救ひ出されるつて、皆んな本當に親切ねえ」

と歎歎泣きの聲が聞えた。

途上の奪取

ケネスが裁判所へ送られる朝、壁一重のピーナへ

「妾、愈よ、今日送られるんだよ、甘くハリー達が救ひ出して呉れるだろうか」と不安な聲で囁いた。

「ハリー達は、お前さんの外へ出されるのを毎日待つてゐるんだよ、お前さん、

今日はお前さんの幸福な日なんだよ、元氣をお出しよ」

「本當にそうだと好いがねえ」

そんな問答を交はしたのだ。

午前十時になるとケネスの檻房が開かれてケネスが女看守や男の守衛に前後を警戒されて出て行つた。思ひなしか、ケネスの顔は色蒼めて頬にやつれが見えて

わた。

ケネスの乗つた護送自動車は警察の門を出ると全速力で疾駆した。

一週間も前から毎日警察の周囲に監視を出してゐたハリー腹心の仲間が、今朝自動車は警察の門前へ引出されたので柵越しに見てゐると色蒼ざめたケネスが乗つたので、

「ソレツ」

とばかり合圖して直ぐその自動車に追跡する自動車三臺を準備した。一臺にはハリーが何處かの會社員や建築技師のやうなスタイルで操縦してゐた。

ケネスを乗せた自動車は一直線に東二番街を通つて右へ曲つて横町を走つた。淋しい通りの東三番街へ入つた。その後を遅れじと全速力で續いた自動車のハリーが乗つて操縦してゐる車が、警察自動車の前へ追ひ起しながら、正面へグツト寄つて來たと思ふと、ハリーはハンドルを放して躍り上るやうに車を飛び降りた

その目にも止まらぬ間一髪のプロエアー、ブレイ、と、恐ろしい音響と共に衝突した。

激動して大破した警察自動車。

警官達はケネスを擁して急いで車から降りると、其處へバラバラと馳け寄つた四五人の漢、狼狽してゐる警官へ拳固で一撃食はして置いて、その騒ぎにケネスは二人の男に抱えられて一臺の自動車へ乗せられると其儘反對の方面へ疾駆した物音で人が寄り集つて來た時は破壊された二臺の自動車と負傷した警察官だけで兇漢と大事な護送犯人のケネスは影も形も無かつた。

青い鳥酒場

キャバレー、ブリューバード、それはブロード、ウエー、裏通りの餘り一般に知られてない代りに一部人士には非常に有名なキャバレーである。そこに一種の

常連といふものが出来て、毎晩集まる顔觸れは毎時も定つてゐるのだ。その常連といふのはどんな階級に属する人物かと云ふと、有閑智識階級といふやうな人間が集まるので、ブロード、ウエーの各劇場の脚本家、舞臺監督、音楽指揮者、貧乏で氣位の高い畫家とか詩人、成金の通俗小説家、批評家、とかいふ連中で其外別に定まつた職業のない云へば藝術愛好家といふやうな智識階級が集まつて一種の雰圍氣を作つてゐるのだ、このキャバレーの踊り子や歌唄ひには中々美人が多いといふ常連の定評があつた。

常連仲間では有名になるとその周囲の友達とか知人とかも次第に出入りするやうになつたが中に各國の新聞のニューヨーク特派員とか通信員がブロードウエーの夜の散歩に青い鳥の扉を押して、こゝでジンカカクテルを飲んでゆつくり腰を据えるといふ習慣が何時か付くやうになつた。

處がこの青い鳥の常連の中に各國のスパイが交じつてゐるといふ噂が警察や政

府當局の耳に入つたのであつた。

スパイと聞いては神経を極度に尖がらした其の筋では、そのスパイを極秘裡に探らせるためにスパイを青い鳥に出す事にした。それは牒報部の方から二人のスパイを別々にやつて、お互全然見知らぬやうに装ほはせて、其内に機會を見出して交友關係が生じた様にした方が都合といふプランを立てた。

その一方、獨逸ナウエン無線電信局の暗號外交電報がしきりに英國駐在大使に向つて發せられるので、それを傍受したメーンの無線電信局から牒報部へ送達されて、それがどうも紐育に居住する各國のスパイの暗中飛躍に關聯してゐる様なところがあるので、米國牒報部は躍起となつて曝露しやうとした。

金があつて暇があつて、株を澤山持つて遊んで食つてゐる贅澤な紳士といふ服装で二人の米國間牒は青い鳥へ出入する事になつた。彼等は潤澤な機密費を當てがはれてゐるので札ピラを綺麗に切つて、先づ青い鳥内部の人間を信用さした。

大勢の客だから、どれがスパイなのか見當がまるで付かない。で如何にも青い鳥の空気が魅力があつて一晩でも来ずにゐられない様に毎晩通つた。餘り二人が一緒に晩ばかり續くと他のスパイに氣取られてはいけないといふので二人で相談して二人はなるべく出會はない様にし、たまに一緒にゐるやうなプランヲ立てた

英國間諜容疑者

「どうも解らないぜ」

「まあ、そんなに早く解らう筈はないぢやないか」

二人の壯年の紳士は米國諜報部員の秘密の會合場所になつてゐる郊外の別荘風の家の客間で話し合つてゐた。これは云ふ迄もなく青い鳥へ密派された二人のスパイであつた。

「だがあの英國人のカネールといふ奴が少し臭いぜ」

「そうか知ら」

「彼奴はあすことを仲間同志の會合場所にしてゐるらしいのだ」

「どうしてそれが解るかね」

「彼奴、此間の晩、歸り途、あすこの常連の二三人とこつそり自動車で何處かへ行つたのだ、跡を自動車で追つかけたが到々見失なつてしまつたのだ」

「それ丈ぢや何も確證にはならないね」

「いや、前からこの二三人の連中とひそ／＼話をしたり、合圖らしい舉動したり變だつたのだ」

「ちや、今夜一緒に行つて二人して別々の處から注意して監視しやう」

「オー、ケーだ」

二人は其處を別々に立ち去つて夜となると青い鳥へやつて來たのだ。ステージでこのスターの、ヘンガアクロハテツクな踊りで嵐のやうな喝采を

浴びてゐた。

怪しの英國人カネールの姿は直ぐ見出された。タキシードを着て椅子に倚つてグラスを挙げながら踊り子のイサベラに調戲つてゐた、米國のスパイの一人モンスリーは態とカネールの傍近の席へ腰を下ろして會釋しながら

「いゝ御機嫌ですわね」

と聲をかけた。顔は見知つてゐたがまだ近付きにはならなかつた。然しこうした處でこれ位の社交は當然だつたので向ふも愛想よく、

「やあ、いらつしやい」

といふのを機會に二人は社交的會話が交はされた。

「どうです、此方でご一緒に一つお話しやうではありませんか」

「それは此方も希望する處で」

其處で二人は改めて自己紹介をやり、兼て顔馴染みの故で、すつかり打ち融け

て友人になつた。モンスリーは腹の中で、先づ好都合に行つた事を喜んだ。モンスリーの仲間のウッド君は遠くの席で知らぬ顔して酒を飲んでゐた。

國際的間諜クラブ

この青い鳥に矢張近頃常連としてよく來るアメリカ人で日本の絹糸業者の外交員をやつてゐると稱するアール、エッチ、レンニーといふ中年男がゐた。鼈甲縁のロイド眼鏡をかけた。洒落男で収入が餘程あると見えて金の使ひ振りが綺麗だつた。それに非常に東洋美術に詳しく常連の藝術家連中に持てゐた。

中々お世辭の好い男だからカネールとも直ぐ交際し初めた、つまり此の青い鳥だけでの友達となつたわけである。

ある晩モンスリーとカネールとレンニーが卓を一緒にして各々、好きな踊り子を擁して酒杯をあげてゐる中に酔拂つたモンスリーは

「どうです、諸君、これから僕の発見したナイト、クラブに行つて今夜一晚中飲
みませんか」

「そいつは好い、レンニー君、君も賛成でせう」

とカネールはレンニーに向つて云つた。何故かレンニーは、そう氣のすゝまぬ
様子を見せ乍らも口では、

「それは結構ですわね」

と云つた。

其處で三人が青い鳥を出てカネールの操縦する自動車で矢張りブロードウエー
にあるちよつと外観は人の氣付かない建物で内部は素晴らしい贅澤なナイト、クラ
ブにモンスリーが案内した。

其處で三人は散々飲んだり踊つたりして、程度を超えて酔つ拂つたと見えたが
後の二人はどうか知らぬがモンスリーだけはそう見せかけてゐたのであつた。や

がて大勢のボーイに介添されて三人は自動車へ丸太ン棒のやうに、然しぐだぐ
になつた酔體を運び込まれた。その自動車の運轉手は誰であらう、モンスリーと
相棒のウッドであつた。二人は兼ねてスケジューをしめし合せて置いたのだ。モ
ンスリーは運轉手に怒鳴つた。

「ベリー夫人の處へやれ」

「何ですか、マダム、ベリーとおつしやるのは」

「何だ、貴様はこのナイト、クラブに出入する自動車の癖に、ベリー夫人を知ら
んとは怪しからんぞ」

「私はまだマダム、ベリーといふ宅へ行つた事が御座いませんから」

「構はん、東二番街の五丁目へやれ」

車は深夜の街を疾驅した。三人はベリー夫人なる淑女の家へ着いた時は夢のや
うに知つてゐた。そしてどうして連れ込まれたか翌朝目を醒ますとレンニーも、

カネールも小綺麗な寢室に深々とした柔かいスプリングの寢臺の上に寝てゐた。彼等の寝てゐる中に、偽運轉手のウッドとペリー夫人とモンズリーがカネールの服装をすつかり残る隈なく探したが何でも最近の手紙を一通発見した切り手懸りになり相なものは発見出来ず失望した。

怪女傑、マダム・ペリー

こゝで一つペリー夫人なる妖女の真相を明瞭にして置こう。ペリー夫人こと、アンネット、ペリーは一種の連れ込み宿、待合のやうな仕組みの家の女將である。彼女の前身は米國の特務機關として支那へ密派された米國陸軍大尉ナイズ、ペリーの妻で中々しつかり者だつた、そしてよく夫の任務を理解して夫の仕事の陰に陽に助けた。ナイズ、ペリーに取つては理想的なアツシスタントであつた。

支那へ密派中にペリー大尉は何者かの手に依つて上海大馬路街頭で深夜暗殺されてしまつたのだ、それで喪服姿で故國アメリカに夫の遺骨を携へて歸つた。アメリカ政府はペリー夫人に豊富な終身、扶助料を呉れた。それで未亡人として氣樂に一生を送れるのであつた。

その後一年程経つてから亡夫の先輩、スコット大佐からペリー夫人に會見を申し込んで来た。ペリー夫人は久し振りでスコット大佐の家へ訪問した。

『現在の御生活に貴女は御満足してゐられますか』

久瀾の挨拶から社交界の噂さや何かの後でスコット大佐は突然こう尋ねた。

『いゝえ、矢張り昔の方が面白う御座いました。ナイズが死んでからは家に引込んでおりますので、どんなに社會が面白い事があつても無關心です』

スコット大佐は同情の意を表して深く頷きながら、

『何か、こう適當な貴女に相應しい愉快な事業とでも申すものは無いものでせう』

か」

「さア、御座いますか知ら、普通女の方の職業は妾は餘り愉快ぢや無いと思ふのですよ、出来ましたら妾は死んだナイズのやうな仕事がして見たら御座います」

スコット大佐は莞爾と笑つて、

「おやりになれば宜敷いのに」

「でも妾を信じて當局が雇つて下されば宜敷いが」

「でも、あゝした仕事は中々至難で一朝一夕では出来ずまい。ベリー大尉のやうな熱誠な強い意志の方でなくては」

「でも、妾、ナイズがあゝの特別任務についてゐる時、ナイズの助手として彼から随分賞讃されたものですわ」

「成る程、そうでせうね、夫人なら任務を遂行出来るでせう、どうです、ベリー大尉の後継者におなりになつては」

とスコット大佐は冗談らしく薦めた。

「でも、たゞ妾がなり度いと申しても採用して呉れませんわ」

「では申しますが、實は夫人に一つ特別な事業をやつて頂き度いと思ふのですがね」

「それは又どんな」

「大變、品の悪い仕事ですよ」

「でも、その仕事はアメリカの爲めに重用な使命を帯びてゐるならば差支へないので御座いませう」

「その通りです、では申しますが、男女のランデブウのホテルです、其のホテルのマダムになつて頂きたいのです」

「オホホ、それは結構ですわ、妾のやうな末亡人に丁度世間體から云つても適當に見えるぢや御座いせんか、妾すゝんで其のホテルを營業しますわ」

「流石は夫人ですな、それでは詳しい事は晚餐後に申し上げませう」

そらいふ話があつて三年前からベリー夫人の職業が出来たわけである。

アメリカのスパイが怪しいと見た外國人を甘言でこゝへ連れ込んで、すつかり柔かくするか、或は又、カネールのやうに身體をこつそり検査されるか、そんな場合には絶好の家であつた。

マダムベリーはスコット大佐の隠れた恋人だといふ噂もあつたし、ダルモンド中將と特別な關係を結んでゐるといふ評判もある。その他出入りする男で艶名を流した事も決して尠くない。マダムベリーは頗る美人の大年増で其上、女傑風な放縦な性格で男と浮氣する事が平氣だつた。

大膽で頭腦がよくて、その上美人であるから、大抵の男は彼女の前に出ると參つてしまふのだ。

このホテルに専屬の女が三人ゐた、皆なマダムベリーのお目鑑にかなつたえら

ものばかりでマダムの部下として一かどの役に立つと云ふ女達だつた。

勿論警察では黙許をしてゐた。といふのはこの客間では時々異なるレビューだの、お話にならぬ芝居が演じられて客達に見せるから當然なら禁止される處だが、それもこれも重大任務の一部分なのだから。

鑑定違ひ

一度このマダム、ベリーの家の面白さを味覺したカネールとレンニーは此處を紹介して引張つて行つて呉れたモンズリーを大いに徳としてモンズリーに對しての兩人の親しみは急激に加はつた様だ。そして可笑しな事には御兩人共マダム、ベリーが大變お氣に召したらしい。それで青い鳥へ行つてモンズリーに會ふとマダム、ベリーの家へ行かうと云ふ程の上せ方だつた。

モンズリーはベリー夫人に向つて、

「ねえ、マダム、あの特務機關先生が貴女に非常な厚意を寄せてゐるがネ、早く解決して下さいよ」

「だつて、向ふも素性が素性ですから、中々其處まで吐き出させるには骨が折れてよ、でも何んとかやつて見ますわ」

「どういふ關係の密偵か、彼の任務を知られば好いんだ」

「あの人、本當に英國の間諜か知ら」

「どうも、そうらしいのだ」

「あのレンニーといふ絹糸の外交員は、どうなんでしょうか」

「あれは、たゞの商人だ、間諜なんか出来る人物ぢや無い」

そんな會話があつてからモンスリーはカネールを連れてやつて來たのだ。

ベリー夫人は下へも置かず待遇した。そしてカネールには特別な愛嬌を見せてちやほやしたものだからカネールは有頂天になつて喜んだ。同じソファに並んで

腰を下した二人は、

「カネールさん、お一人で紐育にいらしてゐて、お淋しいでせうね」

とマダムは意味深長な表情で尋ねた。

「いやあ、ちつとも淋しくありません。むしろ本國にゐるよりづつと愉快ですな特に最近マダムのやうな方とお近付きになつたりして、僕は非常に喜んでゐるのです」

「アラ、でもお國の奥様やお子さんをお思ひになつていらつしやるんでせう」

「僕はまだ、これで結婚前の青年なんです」

「アラ、本當ですか、頼もしいですわ」

モンスリーはヘレンといふ女と頭と頭で仲よく酒を飲みながら、慧敏な視線を走らせて様子を覗つてゐた。

その夜、カネールはベリー夫人に生捕りにされたと、いふのは歸りにはモンス

リー一人で歸つてカネールは遂に姿を見せなかつたのだ。その翌日だつた、モン
スリーは人目を忍ぶやうに一人でやつて來た。

『どうです、カネールの正體が解つたですか』

ベリー夫人は不氣嫌に眉を寄せて

『あの男は間諜ぢやないらしいのよ』

『どうして』

『だつて、妾、カネールに親切ごかしにレンニーは日本の絹布商の外交員だとい
つてゐるが、それは表面で、あれは日本のスパイなんだから彼と交際するには氣
をつけて下さいよ、妾は確かな筋からそれを仄聞して知つてゐるんですつて、氣
を引いて見ると大丈夫です私は外交關係の事は何も知らんからつて平氣なん
ですよ』

『そんな事を云つたんですか』

『えい、もつと大膽な事を云つたわ、貴方も英國の間諜なんだつて噂さがありま
すけど、よく身邊を御注意なさい、妾の父も母も英國人なんですから、妾の母國
のために申上るんです、といふと、カネールは非常に吃驚して、私は絶対に間諜
ぢやないと云ふんです。そして妾の言葉に感謝してゐましたわ』

モンスリーは今度のベリー夫人の仕事の出來は餘り優秀なものでないことを失
望した。モンスリーの直感では、確かにカネールは英國の密偵であると睨んだの
だが、

『まあ、氣長にやつて見て下さい。屹度、何か發見するから』
とベリー夫人を激勵して置いた。

策謀の大誤算

モンスリーは牒報部幹部から青い鳥の常連を秘密調査を命じられて密派されて

ゐるので、未だに端緒を得ないのが苦勞の種だつた。問題のカネールはベリー夫人に任して置くより仕方がなかつた。何故ならば餘りに大膽過ぎるベリー夫人の言葉で、モンスリーがカネールへ近付いて嗅ぎ出そうとすると、例へ萬一カネールがスパイでないにしろ警戒するからだ、だから當らず觸らず前の通りに交際してゐなければならぬ。同僚ウッドも餘り香ばしい成績が上らない様だ。

ウッドとモンスリーは例の別荘の密室で對談した。

「カネールはスパイぢや無いと云ふんだがね」

「どうも彼奴の正體は捕捉し難いね」

「どうだろ、レンニーを吾々の手で買収して、カネールに近付かしたら」

「どうするんだね、その手段は」

ウッドは紙巻煙草でトントンと卓の上を叩きながら聞いた。

「ベリーがレンニーは日本のスパイだつてカネールへ云つてあるのだ、だからレ

ンニーを買収して、日本のスパイに仕立て、米國の機密らしいもの、情報を掴んだ事にして、建造艦船の部分的設計圖でも好いさ、それをカネールに買はせるといふ手段はどうだ」

「買ふかな」

「買はせるんだ」

モンスリーは得意氣に肩を張つた。

「どうして」

「カネールを矢張英國スパイとして取扱ふんだ、レンニーにそう云はせるんだ、カネールさん、貴方を英國の特務機關だといふ事を知つてこの相談を持ちかけますつていふ具合で、偽の設計圖の賣買を持ち出さすのさ、それでカネールは實際スパイでない時はそんな物を買ひたがらないだろう、その時の様子で總ては解るんだ」

「成る程、それも好い工夫だね、僕は亦、別な手段を考へてゐたが、君の方が冒險的だが、その方は好さそうだ」

とウッドは云つた。

「君の手段といふのは、どんなのだ」

「ベリー夫人を態とレンニーに惚れ付かすのさ、カネールはベリー夫人に少し熱くなつてゐるから、この方向轉換に狼狽して全身全霊を捧げて來るといふわけになる。その弱味を付け込んでベリー夫人の凄腕で白状させやうつてんだ」

「うむ、成る程、それも面白いね」

モンズリーは腕組みして天井を仰ぎながら考へ込んだ。

「どうだい、君と僕の計畫を一所に利用したら」

「ひどく効能があり相だね」

二人は哄笑した。

「だが、レンニーを手に入れるにはどうだか」

「彼奴なら大丈夫だ、彼奴、何故か僕を尊敬して僕に近付きたがつてゐるから、屹度僕を蟲に好くだらう」

「ぢや、早い方が好いな、うまくやつて呉れ」

二人は握手して立上つた。ウッドは裏口に置いてあつた自動車で一足、先に歸つた。

敵を飼ふ愚者

ベリー夫人の居間、それは庭園に望んだ二階の東南向きの明るい部屋だつた。豪奢で華麗な室内の調度で目の覺めるやうな美々しい裝飾だつた。中央卓を圍んで主人役のベリー夫人と、モンズリーとレンニーの三人は頭を寄せて密談に耽つてゐる。卓上にはコンヤック、ジンの酒罐とグラスが置いてあつた。

「レンニー君、どうです、甘くやつて呉れますか」

モンスリーは注意深くレンニーの顔を見た。

「さア、大變難しい事ですが、何んだかその仕事に興味を持ちますから、やつて見ませうか」

「どうぞ、レンニーさん、甘くおやり下さい、成功を祈りますわ」

「報酬は一萬弗です。但し亦、今後同じやうな仕事をお願ひ出来ると思ひますから、一つ貴下の手腕をお見せ下さい」

「宜敷いやりませう」

レンニーはモンスリーの手を堅く握つた。

それで愈よレンニーはモンスリーの部下として米國牒報部のために働く事となつたのである。

それで早速、米國海軍の建造艦の一部分の設計圖を、それは勿論いゝ加減な偽

せ物であつた。それを渡して適當な時機を見てカネールに見せる事に相談が定つた。

レンニーはその機密圖をしつかり懐中にして歸つた。

時節外れの快走船

コーネーアイランド行ききの遊覧列車に乗つたレンニーは久し振りで自然の巧まざる美しい風景を心ゆくばかり鑑賞するやうに東窓に靠れて眺めてゐた。

列車が到着すると客待ちの自動車に乗つて、

「パレス、ホテルへ行け」

と命じた。

やがてホテルへ着いた眺望のいゝ部屋に通されて、給仕に知らせて食堂へ晝の食事に出た。時季外れの時なので客は十三四人しか居なかつた。中に一人の黄色

い 東洋の紳士が隅の卓でつましく食事してゐた。

「食事が済むとレンニーは室で一休みすると散歩に出た。ホテルのポーチに立つて海を見ると快走船が白濤を蹴立て、走つてゐた。

レンニーは小手を翳して、

「ほう、快走船がある」

「へえ、あれはこのホテルのお客様で日本のお方です」

と玄關のボーイが云つた。

「日本人かね、中々酔狂だね、この季節外れに」

「毎日、あゝして晝食後快走船にも乗りになるんです」

と云つた。

レンニーは海岸づたひに向ふの小山の蔭まで行つて見たいが、道路はいゝかと尋ねると大丈夫だとボーイは答へた。

レンニーはその立木の繁つた丘の蔭へ来た。そして海上の快走船の走るのを眺めてゐた。快走船は舵を陸へ取つたと見えて此方へ向つて走つて来た。

海岸の砂へ快走船は底を上げた。すると日本紳士はレンニーを招いた。

レンニーは靴を脱いでズボンを捲り上げて浅い水を涉つてヨットへ飛び乗つた

日本紳士とレンニーはどういふ關係なのだろう、

日本紳士とは誰か。

レンニーとは果して何人か。

謎と謎のかけ合ひ、嘘と欺し合ひ、何がなんだか全く解らない事ばかりだ。

快走船にレンニーが乗ると其儘沖へ出た。海上程絶対安全な場所はない。

「何か用があつたのかね」

「面白い事が出来ました。大きな魚が向ふから網に引掛つて来たんですからね」

この二人の人物を明らかにしよう。

日本紳士はX氏であつた。

レンニーと稱する絹糸商の外交員こそは東洋古美術商で日本間牒の容疑者として逃亡したヘンダーソンの第二變換である。

「大魚とは誰の事だ」

X氏は静かに尋ねた。

「米國牒報部のモンスリーですよ」

「それが亦どうして」

不審氣にX氏はレンニーを見た。

「實はカネールといふ英國人をモンスリー一派が、否米國牒報部の注意人物なんです。それでカネールを僕の手を借りて正體を掴み度いといふので一萬弗の報酬で僕を買収したんです。僕は勿論買収されてやりましたよ。米國牒報部の最下級の一員となつたわけですよ」

「ふむ、それは素晴らしい甘い事になつたね」

「今度こそ、僕も何かお手柄が出来そうです。カネールなんかどうだつて好い、モンスリーと秘密な連絡を付けた事が非常に嬉しいですよ」

「それでどういふ具合にカネールに近付くんだね」

「偽ものの建造艦設計圖をカネールに僕から賣込めといふのです。僕を日本のパイとしてですわね」

「何に、君を日本のスパイにしてだつて」

「勿論、僕の事は何も知らないで、唯カネールを欺く手段としてモンスリー達が考へた芝居なんです」

「成る程そうか」

「それで、僕は表面は日本絹糸の外交員で一皮剥げば米國のスパイですが、更にもう一皮剥げばX氏の忠實な部下といふ事になりますねアハハハ」

快走船は人無き海上を帆に風を孕んで十二三節の速力で走つてゐた。

大膽なる告白

地球上の人類の永遠の平和協存の前提としての軍縮會議、これに参加する國際聯盟中の五大強國、日本、米佛伊が主たる交渉國であつた。

だが軍縮といふ美名のもとに相手國の軍備を自國の率より少くさせようと互に鎗を削づるに全權共は汗を流し口角泡を飛ばした。米國は日英の海軍力が苦勞の種だつた。英國は表面米國の意見に賛成と見せかけて老獪無比な外交術で米國を安心させて、自國を有利に導いた。感情家の佛蘭西は成り上り者の米國の態度を輕蔑した。米國の提議を頭からはねつけた。壽府會議の決裂の責任者はフランスであつた。

佛蘭西は締盟各國から決裂の責任者たる不名譽を着せられても平氣だつた。

日本は飽く迄も平和協調第一主義で通した。そして英米の兩新聞に日本賞讃の聲が立つた。

然しそれはすべて表面の國際的常識の上の事實であつた。

複雑極まる外交上、國家自衛上のデリケートな運動は世界各國共暗中飛躍がなされてゐる事は言を俟つ迄もなく誰しも認識される處だ。

カネールの寓居を突然訪れたレンニーは客間に通されると、

「カネール君、僕は誠實を持つて貴方に相談したい事があるのです」

「ほ、う、何事ですそれは」

「僕はすべてを率直に云ひます。事は最も秘密に屬する事なのです。この秘密を貴下に打明ける前に、貴下が絶対に他言しない事を誓つて呉れますか」

「レンニー君、大變面倒な事ですね、私は君が私の親しい友人として、私に打明けた事は譬へどんな事でも秘密を守りませう。僕も英國の紳士です、誓つて君の

云ふ秘密を他言しません、安心して云つて下さい」

「では申しませう」

「ちよつと」

カネールは手で制して静かに立上ると扉を明けて廊下を見廻してびたりと扉を閉めてから、三つの窓のブラインドを下ろして戸外から見えないやうにした。そして椅子へ腰を下ろすと、常になく緊張した顔で、

「その御相談といふのは」

と低い聲で云つた。

「驚いてはいけませんよ、私は日本の間諜の任務を持つてゐます」

「それは知つてゐました」

カネールは落着いた聲でいつた。

兩國利益交換

レンニーは此處で驚愕した表情になつて見せねばならぬ。

「ど、どうしてそれを貴方が知りました」

「マダム、ベリーが私にそう云つて知らして呉れたのです」

「彼女は私の密偵である事を知つたのか」

「油断は出来ませんよ」

「うむ」

レンニーは呻つた。勿論これは芝居であつたが、

「そして貴下が私にする御用は何事です」

「僕は僕の任務上の責任から日常、活動してゐます。そして最近ある造船所の職工から建造艦の機密圖を買取りました。これは私の手で模寫しましたが、これを

「貴下に買つて欲しいと思ふのです。貴下がお買ひにならなければ英國大使館の海軍武官の方へ御紹會願ひたいのです」

「貴方は日本のスパイとして、何故それを日本に有利な様に獨占しないで、わが英國にそれを賣り込ませようとなさるのです」

カネールはレンニーの腹の底まで見透すやうに鋭どく云つた。

「それは、斯うなんです、私一人の手で情報が狭い範圍のものしか入らない。もつともつと、知り度い事がある。そこで私は他の何國かのスパイと協力して任務を果したいと考へたのです」

「然しそれは非常な冒険ではないですか」

「冒険です。然し利益の交換出来る冒険は最も安全なのです、それで私の最も親しい英國人は貴下だ、英國人は意志的で沈着だ、貴下になればこの秘密を折ち明けても好いと思つた」

「いや、よく君自身の重大な秘密を打明けて下さつた、君の信頼に對して僕は心から感謝します」

とカネールは沈黙したが、

「その建造艦の圖面は貴下が今持つてゐますか」

「持つてます共」

「それを僕に見せて呉れる事が出来ますか」

「喜んで、御目にかけてませう」

レンニーは短衣の釦を外して二通の青寫眞を卓の上へ置いた。

「これが正と副です。正の方は僕の方で入用です。摸寫したのは英國に賣りたいのです」

二つの青寫眞の圖面を丁寧に見てゐたカネールは立つて事務卓の抽出しから擴大鏡を出して非常に細心に検査した。

「これ、いくらで私に提供して呉れますか」

カネールは沈着して云つた。

「貴下がこれを御入用なのですね」

「欲しいと思ひます」

「貴下の御任務上からですか」

レンニーはカネールの眼を覗き込んだ。

「左様です、貴下の誠實な告白の前に私が自分の身分を隠して置く事は鬼怯ですそれに私も矢張りこの國ではスパイだといふ噂さかも立つてゐるのです、例のベリーさんから聞きました。然しあのマダム。ベリーは謎の人物ですね、それからモンスリーも怪しい男です」

「お互氣を付けませう」

レンニーとカネールは握手して互の友情を誓つた。

戦時編成企劃書

カネールは戸棚から白葡萄酒の壺とグラスを出して満々と二つのグラスに注いでレンニーに侑めながら、ざつくばらん言葉になつて、

「で、この圖面はいくらで僕に譲つて呉れるね」

「千磅ではどうだい」

「宜かろう、然し僕も一つ君に見せたいものがあるんだ」

「物は何んだね」

カネールは立つて鍵を持つて次の間へ入つた。少時すると手に袋入りの書類を持つて來た。

「まあ、中味を見て呉れ給へ」

レンニーは手に取つて見ると米國太平洋艦隊の戦時編成企劃書で海軍少將、エ

ツチ、ヂー、バーマー氏の提案に成るものであつた。

レンニーは目を輝かした。此方から出したものが紅寶石なら、先から返禮されたのがダイヤモンドだ。而も容易に入手し難い名寶石であつた。これは大したものだ、と中心驚いたが、表面落着いて、

「ほ、う、珍らしいんだね」

「欲しいとは思はんかね」

カネールは微笑してゐた。

「欲しい事は欲しいが高價だろ」

「いや、何んなら君のくれた設計圖と交換して宜敷い」

「出處は確か、ね」

「海軍省の下級な人間から買ひ取つたのだ、老人で妻君が病氣してゐる可哀そな男だつたグレー大尉といふ高級副官の部屋から盗み出して寫真に取つたのだ」

「宜しい、では喜んで交換に應じやう」

「では取引が済んだ、今後とも、お互の地位を利用して利益の交換をやらう」

「勿論だ」

レンニーはカネールを巧みに欺ました事が良心的に悔ひられた。だが思ひがけない大きな収穫に有頂天になつた。太平洋艦隊の戦時編成企劃書、米國海軍少將エツチ、ジー、バーマー氏提案、こんな巨大な鯨が懐中へ飛び込んだのだ。

「カネールには今後、何か好い材料を呉れてやろう」と思つた。そして、

「矢張り、カネールも間牒だつたんだ」

何んだか彼自身の事はさて置き、周圍は間牒ばかり、うよくくしてゐる氣がした。

彼はその足で彼の現在の家、第四十五番街のアパートへ歸つて来て、事務員のフランクを呼んだ。それは脱艦下士官のコンゼーの變換人物であつた。こゝではフランクと呼んでゐるのだ。

「あゝ、フランク、直ぐハリーをビーナの處へ行くやうに云つてくれ」

「はあ、畏まりました」

と彼は出て行つた。

間も無くレンニーも出て行つた。

謎の狙撃

ビーナの家へレンニーが着くとハリーが待つて居た。

「これをX氏に渡して呉れ、すべては明後日例の處で會つて詳しく話すといふ事にして、あゝビーナ、ブロードウキーへ行くんだ直ぐ仕度をして呉れ」

ビーナの仕度が出来ると二人は戀人のやうに手を組んで外へ出た。

ビーナの家へレンニーが誘ひに来たとしか見えなだらう。

其晩ビーナと芝居を見て食事をして、ナイト、クラブで夜明けまでビーナと踊つて三時頃歸つて来た。若しレンニーの行動を監視する密偵が跡を付けたにしろ疑間の個處は少しも無いのだ。

翌々日は雨が降つた。

X氏の住居の山の手にあつた、レンニーは兩具で身を堅めて戸外へ出ると自動車も三度も態と乗り換へてX氏の宅へ来た。

「あれを御覧になりましたか」

一番にそれを尋ねた。

「見たよ、こんな素晴らしいものが手に入つたとは實に幸運だつた。俺は他から手を廻して調べてゐた處に符號するから出處は確實だと云へる。一體どうして手に

入つたんだね」

X氏の問ひにレンニーは詳しく一切を話した。

「それは非常に都合だつた。これからは君の手で色々な事が情報が得られるし
つかりやつて呉れ給へよ」

「大丈夫です。Xさん、貴方の恩義に對して僕は僕全身を貴方に捧げてゐるんで
すから、貴方のやうな方を持つ日本は幸福ですね」

「まあ、好いさ、俺も今度の君の偉大な勳功に對して報ひなければならぬ
山のやうに積んだ紙幣の束、それは一見して五萬弗以上あつた。

「この書類はどうしてお送りになりますか」

「それは何でも無い、大使館の海軍武官に本國から召喚命令を出して貰つて歸國
してくれば、それに托すのだ」

「暗號電報ではいけませんか」

「暗號電報の解讀は各國それぞれ秘密に機關を設けて熱心にそれをやつてゐるか
ら警戒しなくてはいけない。持參するのが安全だ」

X氏はそう云ひながらその書類の頁を繰つて讀み返してゐた。

X氏のもとを辭したレンニーは歸途も車を二三度換えてブロード、ウエーの青
い鳥へ現はれた。モンスリーもカネールもゐた。皆なに挨拶すると傍らの席へ着

いた。

「どうです、儲りましたか」

「え、相當に収入がありますよ、何せ好景氣で日本絹糸がどんどん賣れますから
ね、唯、人造絹糸業者が近頃ぼつぼつ製造し初めましたからね」

「でも天然絹糸には到底追隨出来ませんよ」

そんな表面だけの御座なりで酒を呑んでゐたが、酔ひが廻つて來るとモンスリ
ーはマダム、ベリーの家へ行かうと提議した。レンニーは即座に賛成した。やが

て日英米の三ヶ國の間諜が何食はぬ顔で巫山戯ながら深夜の街を自動車で飛ばした。

車が三十五番街の並木通りへかゝつた。速力は一層へビーになつたと、突如バーン!!!
車は激動と共に宙返りして道端へ擲き付けられた。

重傷を負ふたモンスリー

乗つてゐた三人は勿論、跳ね飛ばされて仕舞つた。
爆弾?

何者の仕業?

物音に驚いて通報したと見えて警官が大勢駆け付けた。三人の紳士は皆、傷を負ふて氣絶してゐたので直ぐ近所の病院に運ばれた。

モンスリーとレンニーは重傷だつた。左腕骨折と顔面に破裂した自動車の破片で深く傷があつた。モンスリーと、いきなり跳ね飛ばされて腰部と後頭部を強く打つたレンニーは、全治四週間を要すると云つた。カネールは一番軽く二週間全治の負傷だつた。

警察では直ちに犯人の搜索にかゝつたが目星は付かなかつた。

負傷した三人は三様の思ひで相手を疑つた。

モンスリーは、カネールが吾々の策謀を觀破して吾々を殺すつもりでこの冒険を敢行したなと思ひ、レンニーは、カネールと自分が會見して互の獲物、それはレンニーの出したのはモンスリーから出た偽物ではあつたがそれを何處からか臭ぎ付けて米國のスパイがやつた事だと思ひ、カネールは、レンニーをすつかり信じてゐたので、日英スパイの秘密提携を知られて、モンスリーの手に依つて、これが成されたのだと思つた。

だが表面、お互に慰め合つたり、見舞ひ合つたりした。カネールは二週間経つと退院した。

「カネールが臭いね」

「だが果してどうか解らんよ」

「では彼の負傷が一番軽いぜ」

「あの突嗟の場合、傷の軽重なんか加減してゐられるもんか、そんな事は人間業で出来ないよ」

「それにしても犯人はまだ上らんね、紐育の警察は實に緩漫極まる。今に市俄古同様に罪惡の世界的都合になつて仕舞ふ」

マダム、ベリーが花束を持參して見舞ひに來た。日本絹糸業者の紐育代表のミスター、サナダとミスター、タテカワがレンニーへ見舞に來た。

二人が退院しても到々犯人は見付らなかつた。

モンスリーは紐育警察官の無能振りを散々に罵倒して、

「吾々の車に危害を加えたのは確かに吾々の如何なる任務にある人間かを知つての所意だ、之を等閑に附す事は出来ない。事は重大な問題だよ、牒報部の幹部に上申して極力犯人を嚴探しなくてはならない」

そして彼はその通りに牒報部の幹部クレーグリン少佐に訴えた。

「君に言はれる迄もなく調査はしてゐる。俺の考へでは、どうも墨耳古政府のヌバイだと思ふんだがね、つまり犯人はメキシコ人だよ、犯人の手口が大雑把で亂暴で、確かにその方面だと思つて紐育在住のメキ共を洗つてゐるんだ。警察では騒いでばかりゐて一向、役に立たん」

クレーグリン少佐はそう云つてモンスリーを慰めた。

レンニーが快癒後モンスリーの手前、カネールへ近附いてゐるやうに見せかける爲め時々カネールの住居を尋ねる外、青い鳥に入浸りになつて別段これといふ仕事はしてゐなかつた。何しろ彼として最大な効果的仕事をしたのだから、例の大平洋艦隊戦時編成企劃書を手に入れた後だ。多少、休養してもよかつた。殊に不慮の重傷の快癒直後だつた。それにX氏からの指令も無い、モンスリーの方の指令は此方で利用の出来ないやうな仕事は甘くごまかして居ればよい。行きつけのレストラン、ビーチで晝食を食つて、新聞を讀んでゐるとモンスリーの處から急使が來た。

「紐育市場の絹糸相場の事で急用が出来ましたから直ぐお歸り下さい」
そんな暗號が使用されてゐるのだ。

「よし直ぐ歸る」
「ご一緒に」

その使の青年は云つた

「そんなに急な用か」

「そうらしいんです」

自動車は例の別荘へ着けられた。待ち兼ねたやうにモンスリーは顔を出した。

二人は無言で握手すると階段を上つて二階の密室へ入つて扉をびんと閉めた。

「君、重大な用務があるんだ、直ぐ華盛頓へ出張して呉れ給へ」

「僕に」

「そうだ、吾々では各國のスパイが蒼蠅い、君なら先づ牒報部のメンバーと氣が付く奴はゐない。若し君を尾行する奴がゐるとすれば味方の密偵だ」

レンニーは心から苦笑を洩らした。

「宜敷い、引受けた」

その用件は紐育の牒報部で手に入れた。今度の軍縮會議開會に先立つての各國

政府の對策に關して、米國駐紮大公使に本國政府から發した暗號電報の訓令を傍受したものを數百通、華盛頓の牒報部が某機關に届ける任務だつた。

「直ぐ今から行つて呉れるかい」

「行くが、ちよいと歸宅してからではどうだ」

「何か家に用事があるのか」

「別段用事はないが毎日の仕來りで、書類や何か卓上へ放りばなしにしてあるから、一應片付けて來なくてはいけない」

「それも左様だ、おや、今夜七時のサザンプトンで立つてるか」

「充分間に合ふ」

レンニーは急いで家に引返した。フランクを呼んで、

「ハリーに急いで、俺が華盛頓へ重要書類を携帶して行く事になつたと云つて來てくれ、今夜七時に立つんだ」

「ハア宜敷い」

フランクは飛んで行つた。カネールに知らしてやろうと思ふが好い方法が無かつた。

カネールには恩といふ程の事はないが、例の巨大な鯨を贈られてゐるから、此方が腐つて食はれぬ鱒を提供したのに對して、だから何か一つ報ひやうと思つてゐた。

フランクが歸つて來た。

「ハリーさんが自分で此處へ來るそうです」

「どうしてだらう」

煙突掃除の爺になり切つてゐるハリーがやつて來た。

「君が一人でその重要書類を持つて行くのは都合が悪いね」
「どうしてだ」

「途中、汽車の中で拘つてしまひたいんだが、それには君でない人間の方が好いな」

「誰か一人護衛をつけるか」

「護衛が付かなくても尾行が付くだらう。だが、君が携帯してゐるのを拘つたとなると君が面目を失つて今後あすこの仕事が出来なくなる」

とハリーは云ふのだつた。

「何しろ仕事は汽車の中で抜き取つて華盛頓へ着く迄に元通りしなくてはならんといふのだからな」
ちよつといゝ工夫が出て來なかつた。

列車中の早業

一等室に乗つたレンニーは重要書類の鞆を網棚へ載せて置いて新聞を讀んでゐ

た。向ふ側に商用に紐育へ出て來た田舎の都會の商店の主人とも見える中年の男が矢張り新聞を擴げて熱心に讀んでゐるのだ。

汽車はエクス、プレスだつたから二三の停車場を飛び過ぎてから最初に停車した驛で一人の田舎成金らしい男が乗つた。そして田舎の商家の主人らしい男の前に坐をしめたが、やがて二人は小麥の相場の話から昨今の景氣の話に油が乗つてゐた。レンニーは二人の話聞きながらウォルターの通俗小説を讀んでゐた。

「どうです」

田舎成金らしい男が田舎商家の旦那に煙草を侷めた。それから一時間程経つとその二人は段々睡けが催して來たか話が途絶えて、田舎成金がまづ雷のやうな軀を掻きはじめた。すると田舎の旦那も負けじと軀の競技に参加した。そして少時すると田舎成金は、急にぼつちり目を明いて、レンニーを見て、にやりと笑ひながら指を一本立て、合圖した。まんまと田舎成金に化けたのはハリーであつたの

だ、レンニーはその合圖を受けると、網棚の鞆を下ろして中から重要書類入りの革囊を出すとハリーに渡した。ハリーは肩掛の中へ捲くと知らぬ顔して又寝た振りをした。

『此處はどの邊でがすかね』

寝呆けた聲で怒鳴つたのはハリーだつた。レンニーハ知らぬ振りをしてゐた田舎商家の旦那はその聲で目が覺めたらしい。

やがて車掌を呼んで次の驛を聞いてゐた田舎成金のハリー、驛へ着くと狼狽して降りて行つた。

この同じ列車の中に日本人と三人のアメリカの男と二人の貴婦人風のアメリカの淑女が乗つてゐたのだ。列車が夜中にある驛に停車すると、明けてあつた窓から、ひらりと一個の品物が車内へ舞ひ込んで來た。拾つた一人の淑女は素早くそれを隠した。そして平氣な顔で歌を唄つてゐた。

それは何んだらう。例のレンニーの携帶してゐた革囊であつた。それが此の車室で處理されて、又元通りにされて持主のレンニーに返戻されても好いやうになつてゐる。

列車が華盛頓へ着いて大勢の旅客が降りたレンニーは停車場構内のトイレットに入つた勿論重要書類の入つてゐる——それはちやんと一味の手に入つてゐるが——鞆を大事そうに抱えてゐる彼が便所を出る時、その重要書類は完全に鞆の中に入つてゐた。極めて短時間内の敏捷なトリツク。

そして自動車に乗ると堂々と華盛頓政府の某官廳に乗り込んで首尾よく使命を果したので。

各國間諜のポートレース

暗號電報を寫真に撮つた。その敏速な手段は列車の内での仕事であつた。それ

を待つて紐育へ歸つたX氏一行の男女は其儘、別れ別れになつて歸路に着いた。X氏は寓居へ歸ると、直ぐ秘密の設備のある暗室へ入つて暗號電報を吸ひ取つた乾板を現像した。

華盛頓に密使として遣はされたレンニーは途中で中味を寫眞にした外、米國政府のお役所の中から何か嗅ぎ出そうと努めたが結局無駄だつた。唯だ到着の晩に慰勞のため、フレイメン、ベル氏邸で夫妻から招宴に預つた。席上でベル氏が、「近頃、紐育に大分世界各國の間諜が入り込んでゐて國際的間諜クラブが存在してゐるといふのは本當かね」と言つた。レンニーは覺えず失笑して、

「閣下、紐育はいくら尖端的でもまだ國際的なスパイのクラブはありません」と何氣なく答へた。

「でも、ブロード、ウエーの青い鳥といふキャバレーには大分國際的な空氣が濃

厚であるといふ噂さだが」

「おや、青い鳥の話を知つてゐるのかと、レンニーは聊か警戒した。

「何に、大した事がありません。一時英國のスパイの嫌疑者がゐるといふので監視しましたが、英國のスパイだといふ證據は上らないのです」

「どんな男だね」

「そうですね年齢三十七八歳の、額の廣い鼻の長い無髭の男です。蒼色の瞳で立派な容貌です。通稱カネールと云つてゐます」

「ふむ、そんな男があつたかも知れん」

ベル氏は魚のフライを肉刺で突き刺して口へ持つて行つた。

ベル夫人は女らしい細かさで間牒の行動を興味を持つて聞き出したので、レンニーは誇張を交へて嘘實取交ぜ面白く話した。

やがて食事が済むとベル氏の書齋へ呼ばれた。ベル氏は大きな書棚から龐大な

寫眞帳を取出して、Eの部を繰つてゐたが、

『カネールと云ふ男は、これぢやないか』

と指さしてレンニーに見せた。レンニーは顔を寄せてその寫眞を見ると確かにカネールだつた。其の寫眞の傍に、何かの番號らしく、E285としてあつた。

『これです。これに相違御座いませぬ』

『そうか、ぢや札付きのスパイぢやないか、この黒表に載る光榮を有する奴ならば、紐育の出張機關は少し呑氣ぢやな』

レンニーはそんな事より、うつかりすると自分の寫眞が載つてゐないものでも無いといふ不安があつた。寫眞帳を渡されたのを幸ひはじめから、丁寧に繰つて見た。ベル氏は葉巻を吹かしながら何か考へ事してゐるやうだつた。

Gの部を見る時レンニーは心が躍つた。多くの日本人の顔の中に歐米人の顔が交ちつてゐるのがへんに心を重くした。Gの一九一五、

「アッ」

と咽喉まで突き出て来る叫びをやつと堪えた。其のGの一九一五のナンバーを附せられた顔こそレンニーがヘンダーソンと稱して東洋古美術商を經營してゐた時寫した顔に相違なかつた。彼は心中の激しい動搖を強いて隠して靜かに次の頁を繰つた時、ベル氏は知つてか知らずにか、

『どうだ、大分参考になるだろう』

と突然こう尋ねた。

『はあ、よく蒐集したもので御座いますな。世界各国のがこうよく集まつたものでありますな』

『ハハハ、郵便切手の蒐集よりは少し難かしかつたよ』
と上機嫌に笑ひ出した。

間諜の人間味

レンニーは自分の寫真が日本の間諜として麗々しく載つてゐてG——一九一五の番號迄ちやんと附せられてゐるのを見て戦慄を感じた。ベル氏のもとを早々にして立去つた。

「ベル氏は一體俺の正態を知つてゐて態と知らぬ顔をしてゐるのだろうか、危ない、々々、それにしても俺もいゝ加減こんな仕事から足を洗ひたいものだ」とホテルに歸つてからも考へ込んでゐた。

紐育へ歸るとモンスリーに首尾よく使を果した事を報告した。モンスリーは列車中の早業を知らないでレンニーの勞を犒らつた。

「君が無事に使命を遂行したことは向ふからの電報で承知してゐた、何か向ふへ行つて参考になるものがあつたかね」

「うん、ベル氏に各國スパイ嫌疑者の寫真を見せて貰つたよ」

「へえ、そいつわ素敵だつたな、俺でさいまだ、それは見た事がないんだ」

「君、Eの部にカネールの顔があつたよ」

「ふーむ、すると矢張りカーネルは僕の睨んだ通りだつたんだな」

「どう處分するんだね」

「それは種々あるさ、ギャングランドの連中に任してネムらせるか、國外追放か、真綿で首を占めて自滅さすか、方法はいくらでもある」

「一番いゝ方法は、どれだ」

「國外追放さ、それが一番健全だ」

モンスリーは書類を繰り乍ら白い歯を出して笑つた。

レンニーは一旦、家に歸つて夜になる迄一と眠りした。夕方になつて起きると青い鳥へ出掛けた。馴染のクラ、だの、ベッシーだの、アントワネットだのとい

ふ娘たちが寄つて来て、アプサンを呑んだ。

「カネール君は、まだ来ないね」

「もう、来る時刻よ」

カネールが来たなら、暗號電報と黒表に彼がちやんと載つてゐる事を知らして、彼の身邊に危険の迫つてゐる事を教えて退去させなくてはならないのだ、どうしてそれを彼の耳に入れやうか、それを考へた。

九時頃になつて彼は何時もの通り元氣よくやつて来て、レンニーを見ると親し氣に肩を叩いた。

「カネール君、話があるんだが」

女共が立つた隙に囁いた。

「解つた、歸りは一緒に」

「それが危険だ、別々に出やう」

カネールは頷いた。

カネールは先に歸つた。時は十二時が少し廻つてゐたが、立上る時レンニーの前へ、極自然に紙切れを落として行つた。レンニーは何氣なくそれを拾つてポケットへ入れた。それから三十分程してレンニーも立上つた。

警告を與へたレンニー

「な五丁目の酒場、ブラツク、ハウスの地下室へ」

カネールの紙片には鉛筆の走り書でそう書かれてあつた。

程近い距離だが自動車で行つた。十分とはかゝらなかつた。

「待つてゐた」

レンニーが扉を入つて行くと入口のボックスにゐたカネールは、そう云ひながらレンニーの肩を擁してホールの外へ出て奥深い廊下をずんずん行つて小さな室

へ入つた。

「カネール君、君は米國政府のブラックノストに載つてゐる。身邊が危いから、速かに退去したまへ、僕は君に友人としてお話するのだ」

「そうか、僕も薄々、そんな事だろうと思つてゐた。君の厚意は有難う」

「それから、英國は暗號電報の暗號を早く換改し給へ、言ふ事はそれだけだ。二人がこんな密室で話をしてゐる事は互のためよくない」

レンニーはそう云ひながら半分扉の外へ出てゐた。そして後も見ずに其儘、戸外へ飛出すと通りかゝつた自動車に乗ると、

「全速力で三十五番街まで」

自動車の止まつた處は彼の住居であつた。

フランクは狼狽して、迎へ出て、

「ハリーが、いま此處から警官に拘引されて行きました」

「どうして」

「さア、何だか解りませんが、貴方をこの部屋で待つてゐる間に、いきなり警察に踏み込まれたのです」

「それは大變だ、こうしては居られんぞ」

カネールの事より自分の方に危険が間近に迫つた事を感じた。

「此處を身體一つで出よう」

「でも、若しかするとこの附近に警官が張つてはゐませんか」

フランクは不安な顔をした。

「其時は其時だ、どうする別々に出やうか二人一緒に出やうか」

「さア」

フランクは何方が好いか知らずと首を傾げて考へた。

「フランク、好い方法がある」

レンニーは戸棚から酒瓶を杯と二つ出して満々と注いでフランクに飲めと顎をのばして一息に飲んだ。

「おい、飲むんだ、二人とも、へべれけに酔ふ迄、飲むんだ」

「冗談どころぢやありませんぜ」

「大真面目なんだ」

レンニーはそう云つて二杯も三杯も飲んだ。

「フランク、二人がこゝを脱出する唯一の方法なんだ、いゝか、圖六に酔つて警官の目を胡麻化すんだ」

「そうか、成程それは面白い」

二人は二本の酒瓶を空にして手を組んで戸外へ出た。

英國スパイの最後の功績

ワシントン會議に於ける、我が全權加藤友三郎大將の、米國代表の機先を制して有名な逸話がある。それは世界各国が軍備縮少を計る前提的の條件として日本帝國が、若し米國政府が比律賓及びグアムの防備を放棄するものならば、それを米國が快諾したならば、日本も直ちに太平洋諸島、即ち小笠原群島の防備工事を潔よく中止しやうではないか、合理的海軍々備縮少に對して欣んで協力するものであると云つたが加藤全權は、その日本の防備工事が既に完成の域に達してゐるといふ事に付いて遂に一言も云はなかつた。米國がまだ、比律賓もグアムの海軍防禦工事が、まだ工事半ばであつたのだ。

そうした日本外交上の機密を逸早く英國が知つてバイウオーターの言葉になつた處を見ると英國の外交の背景には敏腕な間諜が米本國內で活躍してゐるのだと云へる。

その特種を提供したのは米國政府に捕縛される以前の最後のカネールの殊勳だ

つた。

それをどうして手に入れたか。

カネールがレンニーに提供した米國太平洋艦隊戦時編成企劃書のお禮の意味でハリーがX氏のもとから例の暗號電報と共に齎らされたものであつた。

カネールはその夜レンニーに注意を受けると直ぐレンニーと前後して戶外へ出たのだ。彼の住居へ歸るには危険を感じたので直ちにハドソンの河沿ひのある米人の労働者の家へ一時身を隠す事にした。

『止まれ』

カネールの車は五十一番街の東二丁目の角で、急速力を出して疾驅する車の前方へ突如として二三人の警官に遮られて止まらざるを得ない破目になつた。

カネールは思はず隠の短銃を握りしめた。

『車中の紳士にちよいと降りをお願いします』

『何事ですか』

カネールは車中で傲然として動かなかつたが、

『少しも尋ねしたい事があるのです』

『私は非常に急用があるのです。お調べは後にして頂きたい。私はこう云ふものです』

カネールは平常から用意してある偽名の名刺を出して、

『貴方はこのお名刺の本人でいらつしやいますか』

警官の一人は嘲笑するやうな調子で尋ねた。

『勿論、ジー、オー、マクラレンは私以外の人間にない筈です』

『ではお尋ねしますが、英國リバープに生れの海軍少佐、ウォルター、カネール氏とは誰方です』

失敗つた。

思はず短銃の引金を引いた。鋭どい音響と共に硝子窓が壊れて弾は警官の胸へ
當つたらしく、

「アッ」

一人の警官は胸を壓へて地面に突つ伏した。

「危いッ、短銃だ」

「捕縛して仕舞へッ」

そんな聲が警官隊の中から聞えた。カネールは落着拂つて、

「俺の職務に妨害する奴は誰でも容赦せんぞ」

短銃は続け様に警官隊へ狙ひ撃にされたが多勢に無勢でカネールは遂に警官隊
の手で捕縛されてしまつた。

スパイの觸手は伸びる

米國××州の沿岸にある最新科學の粹を誇る海軍大工廠の模型工場のA—N
05、の職工に非常な大男がゐた。力は三人前もあつて鐵材などは三人でやつと
持ち上げる位の重量のものを一人で軽々と持ち上げて運んだ。

彼の名はケンスピーと云つてカンサス州の百姓の伴だと云ふのだ、技術は餘り
腕の好い方では無いが、無口で陰日向なく働く事と第一に臂力の人並以上な點を
用ひられて、職工仲間でサムリンのケンスピーといふて評判男になつてゐた。

だがそれは表面の事で、彼は紐育でレンニーの家で捕縛された俊敏なハリリーの
乾分としてハリリーの命には絶対服従してゐる男だつた。

ケンスピーがハリリーの命を受けて××州の海軍工廠に職を得たのは、この工
廠内の内部の機密を探るためであつた事は勿論である。そのため一度捕縛され
たハリリーが彼一流の電光石火的トリックで、巧みに脱獄してこの××州へ移住
して何食はぬ顔して労働者の親分に成り済してゐた。

ケンスビーの工場内部で目睹した事實は細大洩らさずハリ親方の手もとへ情報が入つた。

米國の新建造艦の種類、砲塔の模型圖そんなものが適時にハリ親方の手へ運ばれたものだ。萬一、機密書類盜難の重大事件が起つても容疑者としてケンスビーは睨まれる前に何千人の職工が疑はれる筈だつた。それ程彼はそんな事に縁遠い人間と見られてゐるだけに、どんなに有利だつたか知れない。

ある日ハリ親分のところで、

「おい、ケンスビー、一つ今度の新建造艦の設計圖をちよつと持ち出して貰ひてえが、やれるか」

ハリはコニヤウクをケンスビーに進めながら聞いた。

「さアね、やれるかどうか、そんな大切な圖面は技師達が見て、俺たちには見えねえから、何處に藏つてあるか解らねえが」

「技師の机か金庫の中にあるだらうぜ」

「左様かも知れねえ」

「一つやつて見て呉れ」

「晝間の仕事ぢや無えな」

「夜の方が好い、お前なら工場の案内を知つてるから」

「一つやつて見るかな」

ケンスビーは持前の呑氣な氣象で何事でも無い様に答えた。

工場の夜間の警備は水兵が短銃を携帶して立番してゐる外、工場内を幾組もの巡視兵が三十分と間をおかず三人の水兵の一隊が廻つて警戒してゐる程嚴重だつた。

そして工場の建物といふ建物の檐には晝を欺くやうな白煌々たるアークライトが灯つてゐる地上の鐵屑さへ明瞭に見出せる位明るかつた。

しかし如何なものでも寸分隙のないものは無かつた。海に面した隅の一角が塀がなくて海面から泳いで工廠構内へ這ひ上れるやうな場所が一個所あつた。ケンスビーは其處を何時か目につけた。

ある土砂降りの大雷雨の晩だつた。ケンスビーは工廠外の海岸から海へざんぶと飛び込んで沖に錨を下してゐた人の居ないボートの中で雨に濡れながら夜の更けるのを待つた。四時間も冷たい雨に打たれてケンスビーは骨の髄まで濡れた程寒くなつて唇がひやりとして齒の根が合はない程顫えた。然し彼はハリー親分の命令を勇敢に遂行するためにそれを辛抱してゐた。

殆んど寸前の目先が見えないやうな大降りの雨で、海岸の工廠の無数のアーケライトが影のやうに朦朧として見えるのであつた。

「そろ、そろ、出掛けやうか」

恐らくそんな言葉を胸中で呟いてボートから海へ飛び込んだ。水音は勿論誰に

も聞える筈はなかつた。そして海馬のやうに頭だけ出して海岸見がけて泳いだのである。

犯人は工廠内にある？

ケンスビーが無警戒の工廠の一角へ蟹のやうに這ひ上つて、雨が瀧のやうに降るのに全裸の姿で四ん這ひになつて建物の物陰から物陰を傳はつて模型工場のA

—N05の窓際へ上り着いた迄、幸運にも誰にも発見されずに済んだ。しかし流石に窓は嚴重に鍵がかゝつてゐていくら大力のケンスビーでも鍵を捻ぢ切らない限り開く術はなかつた。

「畜生め、いやに頑固だな」

彼は雨の音を幸ひに窓を揺つて見たがどうにもならない。彼は不圖、屋上の空氣抜の窓が開閉する事に氣が付いた。然し屋根へ昇るには

足場も手掛りもなかつた。彼は裸體の儘で暗い物蔭に立つて腕組みをして少時考へ込んだ。

「窓の硝子を破ろうか」

丁度お誂ひ向きの雨の騒音で餘程近くに接近して來ない限り硝子を壊す音が警衛兵たちに聞える心配は無かつたが唯巡視兵が絶えず見廻つてゐるので彼等がこの建物に接近して來た場合にそんな物音を立てると直ぐ發見される恐れがあつた

「儘よ、やつてやれ」

彼は大膽な決心をすると手頃の大きさの鐵屑を拾ふと、コツ、コツと最初は注意深く打ち初めた。

硝子が龜裂した。そして到々窓の一劃の中の硝子を奇麗に取り捨てる時ケンスビーの體が充分通るだけの空虛が出來た。ケンスビーは重量のある體をやつとその窓枠の中へ潜らして完全に内部へ足を下した。

案内を知つた技師の室へ辿り着くと扉のノツブを捻り開けて扉を破損して中へ入つた。そして机の抽出も同様壊はして机の中から書類らしいものを全部抜き出すと片手に抱えて忍び足で先刻破壊した窓と反對側の窓の處で内部から填め差しの鍵を樂々と抜いて窓を開けて多少戶外の様子を窺つて大股に窓を股いで出た。今夜の大雨で警衛の巡視兵もサボつてゐるのかケンスビーが海へ飛び込むまで一人の哨兵にも見付らないのだ。

書類は用意のテープで十文字に結へられて腹へ巻き付けて、泳いだ。ある處まで來ると一隻のボートが靜かに此方へ向つて漕いで來た。

「ハリー親分か」

「ケンスビーか」

ケンスビーは手を取つて助けられながらボートへ上つた。

「首尾は？」

「上々だよ、親分。だが寒くて風をひき相だ」

「よし」

元氣を付ける一杯のコニヤックでケンスビーは甘そうに咽喉を鳴らして飲んだ
そして二杯三杯と。

雨外套を着せられてコニヤックの酔いでケンスビーは漸く人心地が付いた。そ
してポートは工廠からずつと離れた海岸へ着けられて二人の怪漢は何食はぬ顔し
て上陸してしまつた。

翌朝ケンスビーは極く當り前な顔して門衛へ胸の工廠所屬工場のマークを示し
て入つた。そして自分の職場へ來ると見馴れない男が二人ばかりケンスビーを捕
まえて身體検査をした。平氣な顔でいつもの通り無言で検査をされた。

「馬鹿奴、昨夜仕事したものを今迄持つてゐる奴があるかい」

ケンスビーは腹の中で可笑しかつた。だが禁制の煙草を二た箱そこで没収され

た、別段文句は云はれなかつた。

工場内は異様に緊張して、早く出勤した職工たちは、何か囁き合つてゐた。ケ

ンスビーを見ると、

「ケンスビー、大變な事件が起つたぞ」

「何だ」

「昨夜はひどい雨だつたらう。この工場へ泥棒が入つて重要書類を盗まれたん
だ」

「それは大變だ、犯人は捕まつたか」

「危険をおかして工場へ重要書類を盗み出しに來るやうな奴に、そんな、ドヂを
踏む奴がゐるねえよ、お前のやうな凡倉の出來ねえ仕事だ」

ケンスビーは自分を凡倉だと輕蔑する奴の方がどれ位凡倉だか知れないのかと
云ひ返してやり度かつたが、それは飛んでも無い事だから、

「俺は凡倉だから、そんな悪い事はしねえ」

と怒つたやうに答へた。無口で圖體の大きい鈍物と見えたケンスビーがその犯人とは神様以外に知る奴が無いのだ。ケンスビーはこの世の中で恠巧振つた莫迦の多いのを笑つてやり度かつた。恐らくこの犯人は到底捕まるまいと、ケンスビーは腹の中で安心した。

寡黙な職工？

海軍工廠の模型工場の技師室内で重要書類盗難事件の犯人の捜査に當局は狂奔した。いづれ犯人は内部の者か、且つては工場内に居て工廠内をよく知悉するものに相違ないといふ推定から、先づ平常から工廠内の上役連に睨まれてゐる職工達に容疑の眼を向けられた。

だが嫌疑者として嚴重取調べを受けた職工も五人や六人ではなかつたが結局、

現場不在證明が成立つたり、怪しいと思つて洗つて見ると全然そんな事件に關係のない男であつたりして捜査當局は氣を腐らした以上に問題が國家の機密に屬する事であるだけに焦燥して、虱つぶしに水も洩らさぬ潜行的調査の歩を進めた。

ケンスビーは自分の大冒険が成功したのでハリ親分からケンスビーとしては生れて初めての大金五千弗の紙幣と金貨の山を、報酬として貰ふ事が出来て、米國人としての良心の聲よりも莫大な金を得た歡喜の聲の方が遙かに大きかつた。だから彼は決して憂鬱でなかつた。殊に無口で誠實で全く平凡な現代のサムソンであつたから、彼がそんな大それた犯人などと疑ひの目をかける者が一人も居なかつたのだ。ケンスビーは安全地帯に置かれてゐた。他人の目から見ると針の尖ほどにもケンスビーは暗い影を持つてゐないのだから。

ケンスビーはこの工廠の絶大な信用を博してゐる事を知ると、すつかり安心した。

「俺は永久に、俺のした行爲が解らずに済むのだ」
何しろ五千弗が彼の室の秘密な場所にちやんと欠伸をしておとなしく寝てゐるのだ。そろ／＼使つて見たくなるのは無理がない、金の誘惑といふやつで、早く遣つて呉れ、々々と急ぎ立てられる心地になる。
週給の支拂日が来て七十弗の小切手を貰つた。何時もなら嬉しいが、五千弗といふ金を持つた現在の身から見ると一週六日汗みづくで得た金が、これつぼちの目腐れ金かと思ふに七十弗の小切手で、ちんと鼻でも嚙んで仕舞ひたくなる。
工廠内の銀行出張所でチキンチして現金にすると無造作にポケットへつつ込んで、工廠通ひの自動車に乗つた。
重大な冒険事業を遂行したし、大金は入つたし、安全地帯に居るのだし、どんな憂鬱な人間でも朗らかにならざるを得ないではないか。
「今夜は、うんと愉快に遊ばう」

アパートへ歸ると、きちんと身装を整えて、ブルジョアの若い紳士といふ氣取り方で、宵闇迫つた。燈火の明るい街へ出た、
「一本十五仙の安葉巻ではなく五弗ぐらゐの太いやつを吸つて見やう」
煙草屋の窓の前へ立つてレットルの美しい各種の煙草の箱の文字を讀んだ。
愛嬌のある可愛い賣子娘の手で一本五弗の葉巻を五本買つた。そして一本を直ぐ口に啜えてライターを付けた。二十五弗の勘定の外に一弗紙幣を賣子娘の手へふわりと載せて、ちよつとウキンクしてにやりと笑ふと、
「有難う御座います」
立派な男らしい紳士だわ、何處のブルジョアか知らといふ尊敬を含んだ目付をして嫣然と笑つて呉れる。
「金だ、金だ、すべてが金だ」
彼はすつかり氣が強くなつた。酒場の窓々から見える誘惑的な青い赤い燈の數

々、彼はアスファルトの舗道を歩きながら、

『さて、何處へ入ろう』

彼はキャバレー、フランセート看板の出てる、一軒へジャズの音に引き付けられて扉を押して入った。

強烈な酒と白粉と煙草の匂ひの混合酒にまづ心をそゝられる。

新らしい鴨が来たと見て、頬紅の女、バブの女、女女女の洪水がどつとケンスビーの周圍に集まる。

『ねえ、ちよいと、シャンパンを抜かない？』

金髪の十八九の女が熱い息を吹つけて、ねだり出した。

『宜し、シャンパンを抜け』

一瓶、三十弗のシャンパンは勢よくボンと抜かれた。

『ブラボー』

白い纖手に捧げられた泡立つシャンペングラスが口紅の眞赤な唇へ付けられる。ケンスビーは赤黒い健康な顔の相恰を崩して白い齒を出してにッと笑つた。彼は日本人で云ふなら蒲田の鈴木傳明タイプの所謂苦味走つた好男子だつた。

『この男、ちよいとお金持だわ』

シャンペンが惜し氣なく抜かれるので女達は腹の中でそう思つたらしい。黒人の給仕が銀盆へシャンパンを捧げて来たのに五弗の金貨を投げてやつた。黒人の給仕はピフステキのやうな唇を擴げて眞白な齒をくつきり現はして、

『旦那、有難う存じます』

と床へ頭髪が觸れる程頭を下げた。

間 牒 の 戀

ケンスビーはすつかり酔つた。愉快だ、幸福だ、何んでも彼でもすべてが面白

くて堪なかつた。シャンパンの壺を手にして立上つた。ふと舞臺を醉眼朦朧と見開いて見ると、ジャズの曲、

わたしや野の百合
小さな優しい花。

とソプラノの聲で唄つてゐる脊の高い美人の麗やかな姿が目にと止まつた。

「素敵な美人だ」

彼は人の吃驚するの構はず鐵のやうな堅い掌で拍手を鳴り響かした。

「シート、シート」

客席から叱る聲がしたので、ケンスビーを取巻いてゐる女共はケンスビーの肩を壓へて制した。唄が止むと今度は客席から本當に拍手の嵐だ、アンコール、またアンコール、でその唄女は舞臺へ戻つて嫣然と客席へ媚を投げる。一端樂屋へ入つたその唄女は今度はロッキーの山岳地方の田舎娘に扮装して林檎の籠を抱え

て客席へ賣りに來るのだ。男の客は奪ふやうに一個の林檎を買ひ求めて一弗、二弗と拂ふのだ。それはいづれのキャバレーでも斯うしたスターを置いて果物を賣らせるのだ。金高の多い客程、彼女の媚を多分に購ひ得られるのだつた。だから一籠が精々二弗が其處らの林檎が三十弗、五十弗となるのだ。林檎一個が一弗か一弗五十仙になる勘定で、こんな不廉い林檎があるものではない。

ケンスビーはそのスターをまじろぎもせず見てゐたが客席を次第に彼のそばへ寄つて來ると、彼はポケットから金貨や紙幣を鷲掴みにして彼女を待つてゐた。ケンスビーは奪ふやうに籠の林檎を一つ取つた。そして片手に握つた金を籠の中へ入れた。彼女は、につこりとして彼の卓の上へ腰を下ろした。ケンスビーは氣前よく、シャンペンを抜くと一杯注いで彼女の手に持たした。

「有難う」

唄ひ女だけに美しい肉聲だ、それこそ玉を轉がすやうな快よい響を持つてゐる

ケンスビーは莫迦のやうな顔して彼女の顔を仰いでゐた。それはマリアの肖像の前へ連れて行かれた小兒が尊敬と無邪氣とで疑視するやうな純なものだつた。彼女はそれを見流して腰を上げると静かに立去つたのだ。

客席の間を歩きながらケンスビーの顔を振り返つてまた嫣然と笑つて巧みなウキンク。

彼女の姿がカーテンの外に消える迄、ケンスビーは呼吸も吐かずに見惚れたのだ。彼女が愈よ居なくなると、

「シヤペン、シヤペン」

ボン、ボンとシヤンペンが抜かれる。彼は全く前後不覺になる程酔ひつぶれた何處をどうして彼のアパートへ歸つたか解らなかつた。五百弗持つて行つた金が翌朝になつて見ると僅か十弗金貨一枚と五弗紙幣と若干かの銀貨がズボンのポケットに淋しく轉がつてゐた。

その夜も亦ケンスビーはキャバレー、フランセーへ出掛けた。あの美人の唄ひ女の姿が胸にこびり付いて、とてもちつとしては居られないのだ。夜になるのを待ち兼ねてといふ文句通り、頭髪を撫でつけ、上着の埃をブラシでよくはたいて靴をぴかぴかに磨いてケンスビーとしては大凝りに凝つてお洒落れに最後の努力を拂つて戸棚の奥の板を人に氣付れないやうに外して新聞紙包の中から紙幣を三四十枚引抜くとまた元通りにして、外へ飛び出した。

その晩もケンスビーはシヤペンの贅を盡し、紙幣びらを惜し氣もなく切つた。唄ひ女が林檎を賣りに客席へ出ると、凡そ百弗ぐらゐの紙幣を籠の中へ入れて一個の林檎を取つたのだ。周圍にこれを見てゐた女達は流石に目を瞞つて唇をすばめて驚いた表情をした。

「有難う。紳士」

彼女は昨夜より一層親しげに嫣然してケンスビーの右へ寄り添ふやうに卓の上

へ腰を下したのだ。

黄金慾

ケンスピーはそうしてキャバレー、フランセーの唄ひ女にすつかり逆せ上つてしまつた。

五千弗の金は本當に瞬間に消費された。そして以前は辛抱人で堅い彼が結婚費用にと貯へてやつと二千弗になつた銀行預金も悉皆拂戻してキャバレー、フランセーで紙幣びらの虚榮に綺麗に遣ひ果してしまつた。

彼は一文なしの裸一貫になると職場へ出て、ぼんやりして仕事に付かなかつた。

模型用の木材の面に彼女、例の唄ひ女、アルマ、ミデーネの嫣然とした顔が映した。圓盤鋸の木材を切る響がアルマのソプラノの肉聲のやうに響いた。

そして彼が一と月餘りキャバレー、フランセーに入浸りしてゐた時の豪勢振りや、アルマとの次第に親密の増して行つたことや、他の女たちや給仕が彼を下にも置かぬ厚遇振りが映畫のやうに彼の目の前にちら付いた。

キャバレー、フランセーへ行き度いなア。彼の念頭にその歎聲が付いて廻つた

「ケンス、何をぼんやりしてゐるんだ、しつかりしろ」
「お前、何にを考へ込んでゐる。近頃へんだぞ、氣を付ける、餘り様子が怪しいとデカに目を付けられるぜ」

仲間の職工からよく斯う云はれた。

例の軍機の機密に關する重要書類の犯人がまだ擧げられてゐないので何も知らない同僚がまさかケンスピーが眞犯人だとは夢にも知らず、こうした注意をする程、ケンスピーの様子が變つてゐたのだ。

「アルマ、アルマ、おゝアルマよ」

彼は口に出して彼女の名を呼んで見た。

「妾のケンス」

アルマが酔つて彼の肩へ手を掛けて頬へ唇を付けながら囁いた。その惱ましい蜜のやうな聲が今でも耳もとへ聞えるのだ。

「金が無くしては、彼處へ行けない。五百弗三百弗と一晚に遣つた俺だ、十弗や二十弗の金持つて彼處へは行けない」

ケンスビーは男の虚榮で、幾らアルマに會ひ度くてもそれが出来なかつた。

「金を作ろう。金さいあれば」

彼は鋭どい眼付である一點を睨んだ、そして自分にも聞えぬ位低く呟いた。

ハリー親分の仕事、人間として最劣等な自國を賣る破廉耻漢の所業だ、あの骨身を削るやうな冒険の辛苦。

然しあのアルマの美しい顔には何物も比敵し難い魅力だつた。

「ハリー親方の處へ行つて、あの仕事をさせて貰ふやうに仕向けるか」

と考へたが、あれ以來、工廠内の物々しい嚴重さは到底一分の隙も無く、夜間の警衛は前は四組の巡視兵を十組に増したのだつた。

冒険以上の冒険が要る。

果して出来るだらうか、どちらか弱い心が浮ぶのを強いて押えつけて仕舞つた

再度の冒険

陰氣な狭い屋根裏の部屋だつた。通りに面したところに小さな窓が二つあつて其處から僅かに路面のアスファルトに反射した光を再びその窓硝子の表面へ映してゐるのだつた。

「大分暫く見えねえが、工廠内の騒ぎで、手前の體がヤバクなつたんぢやねえかと心配してゐたが様子はどんな風だ」

ハリーは毎時も變らない風態でダンヒルの煙りをもくもく立ち昇らせて、ジンを飲んでゐた。

「それは心配ねえんだ、全く不思議な位、誰も俺をその張本人だと思つてる奴は居ねえんだ。警戒が無暗と矢笠しくなつて、職工たちは随分調べられた、でも俺だけは唯の一度も調べた事アねえんだ」

ハリーは、何時も機嫌の好い時するやうに、にやりと笑つた。

「だが無暗と安心しちまつちや、いけねえ、と云つて亦へんにびく／＼してもこいつもいけねえ、何事があつても當り前な顔してゐなくちや」

とハリーは親分らしい訓戒を與えた。ケンスビーは成る程、親分らしい事を云ふわいと腹の底で感心した。

「然し、人間つてもものは甘えもんだ、手前が眞犯人なのに、それも、燈臺下暗しで、他人を詮索するたア、何の事つた」

「本當に」

「で、手前は工廠内では絶対に信望あるんだな」

「そうなんだ、親分」

「どうだい、ケンス、その嚴重な裡で午前仕事出来るか、もつと何かいゝお土産を持つて來ねえか、うんと報酬をはづもう、メリケンの海軍にや俺が忘れる事の出來ねえ恨みがあるんだ、だから今度のメリケンの海軍の禿頭共が智慧を絞つて拵えた新建造の軍艦の設計を根こそぎ引ッ繰返してやりてえんだ、手前も一生懸命にやつて呉れ」

ケンスビーが持ち出さない中にハリーが先に云ひ出したのだ。

「俺も何とか彼奴らの鼻を明かしてやろうと思つてるがね、話によるとあの設計圖を盗んだので亦大急ぎで新らしい設計圖を拵えたつて話だよ」

「ケンス、それを盗つて見ろ」